
非常識な恋模様

ATURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非常識な恋模様

【Nコード】

N7495J

【作者名】

ATURA

【あらすじ】

思っていることが顔に出るためか、周りに思考を読まれてしまう非常識な男。そんな奴がある時、学校をシメる不良スケ番のヘツドに『妹の恋路を手伝え』と脅される。そして気がづけばみんなの恋の相談に付き合わされる。三角関係や教師と生徒の恋愛まで勃発する恋戦争に、はたして主人公は学園生活を生き抜いていけるのか！？

表紙「思った事を直ぐ口にしない人は利口です」（前書き）

言い忘れていたが、歴史上の伊達政宗を期待した人々に言うておく、歴史は残念ながら関係ない、なにせ現代の学園だからな。純粹にギャグを求める気持ちで、軽く見てくれ。

表紙「思った事を直ぐ口にしない人は利口です」

この寒い時期。皆様どうお過ごしですか？

私は補習です。めつさ赤点補習を学校の教室で受けています。

本来なら、お正月に新年参りお餅つき。日本国最古から続くお祝い事をしなければならぬのにもかかわらず、学校機関はあろう事が、権力無き生徒をいい様に扱う始末。

これは横暴たるものではないでしょうか？

「洋季、何か失礼なことを考えてないか？」

顔だけは美人な東雲先生が竹刀片手に睨んでくる。

全く、こんな奴が聖職たる教師になっているとは、ここは一言物申さねば。

「全然！今数学に勤しんでいますので！失礼なことなんてそんな滅相も無い！」

「フン、そうか。じゃあ私はタバコを吸ってくるが、絶対にサボるなよ？」

ふふ、どうやらオレの台詞に困ったようで、いそいそと逃げていきよったわ。

おい、誰だ今なさけねえとか言った奴？

にしても、高校数学とは何とも面妖なものだ。

いやね、理解できないわけじゃないんだよ？たださ、面倒というかなんと云うか。

つか数式じゃなくて文字式ばかりって、それ数字と関係なくね？数字を学ぶで数学だろ？文字式ばかりなら文字学にでもしろや！全く！

「洋季、お前今無茶苦茶なこと考えていただろ？」

「隣の席で同じく補習を受けているのは、真正銘の馬鹿でオレの下僕、設楽龍介。顔がよくてバスケット部エースで女の子にモテるイケ

メン野郎。インターネット内の某掲示板で使われている用語で言うなら、リア充。リアル充実してます、のリア充。つまり全世界の男の敵って奴だ」

「おい、全部口で言ってるぞ？ていうか下僕じゃねえよ」

ふん、オレよりも馬鹿なのは否定しないのだな。まあ事実だしな。勉強しても全く頭に入らないのだからな！努力していても成績は上がらないこいつを見ていると、やはり勉強なんて無駄だというのがよく分かるぜ！よってオレは一切勉強しない！これは天才ゆえの選択なのだよ。

「絶対にお前は天才じゃない。むしろ馬鹿だ」

「貴様ああ！いつ読心術を学んだのだ！」

オレが龍介の襟首をつかんで叫んでいると、後ろにいたもう一人の友が口を挟んできた。

「洋季もリユウも早くしてよ？僕ずっと待っているんだよ？」

こいつは黒三沢佳孝。くろみさわ よしたか黒沢なのか三沢なのかはつきりしない名字だが、本人は成績優秀な生意気小僧である。しかも対人関係を築くのが面倒のようで、偶然幼馴染である我ら二人としかつるまないという、いわば小動物のようなシヨタ坊である。

「ちよつと、洋季変な説明してるだろ今？シヨタ野郎とか言った？」
幼さが残る整った顔が剣幕に包んだ表情をする。まあ佳孝は怖い顔をするのが得意だからね、ここは怒らせないように言い訳をしておこう。

「バツカ、シヨタ坊って思ったんだよ」

優しい笑みでそう言っていると、佳孝はカバンをオレに向けて投げつける。

顔面ヒット。やばいぞ！このカバン辞書込みだからくそいてええ！オレは痛い素振りを見せないように教室の床を転げまわった。

「十分痛そうなりアクションだな」

「ふん、変な事を言う洋季が悪いもんね」

龍介と佳孝がオレを見てはいるが、心配する様子を全く見せない。

全く、幼い頃からの親友同士だと思っていたのに薄情な奴らだな。
オレは恨みを込めながら二人の不幸を心のそこから祈った。

「はいはい。恨めしそうな顔してないで、早く課題終わらせてよ」
佳孝に言われて、ようやくオレは席に着き、課題の続きをする。
そんな日常が、おれ達の日常であった。

「あ、やっべ、これ数学だと思ってたら英語だった」

「どんな間違いしてんだよりユウ」

オレは全てのオチをコイツに持っていかれたような気がして悲しくなった。

生まれた頃から思っていることが表情に出やすい体質、それがこの
オレ『伊藤洋季』。新年を迎えたので、いよいよ二年生へと進級す
る。え？留年？しねえよ馬鹿！

新入生の頃は知り合いがリュウと佳孝のみだったが、ちゃんとクラ
スには馴染めた。まあ佳孝はちょっと異質だったが、まあ会話はで
きるんだからオツケーさ。

そして二年生になり、いよいよ新学年としてのスタートが始めるの
だ。

リュウと佳孝とは別のクラスでな……………。

あれ？おかしくね？

物語的には二人とも重要キャラだろ？もしや設定ミス？

おいおいおいおいおい！オレみたいなギャグの塊がツツコ
ミ無しの教室でやっていけるわけ無いだろ？どうすんだよ？どうす
んの？

オレの心配は余所に、新クラスになってから数日経った。

何とか女子グループにはリュウの知り合いが多数いたため、クラス

の女子とは馴染めた。サンキューリュウ。でもリア充は敵だ。しかし、ところ変わって男子勢とは厳しいものがあつた。それは、野球部などの熱血グループとナヨナヨオタクグループの二つが主な男子グループだからだ。

オタクグループは比較的頭のいい奴が揃っている。結構異質なキャラが多いが、なぜかイケメン部類の奴もいる。まあアニメ好きが揃っただけのグループなので輪に入れないことは無い。会話は一切理解できないが。あ、でも某掲示板の話になら対応できる。

代わって熱血グループも、悪い奴は一切いないのだが、何せいわゆる身内グループ。つまり野球部ばかりの話で盛り上がるため、ついていけない。

要は、ハブられてはいないが孤立している状態………なのである。これは非常にきつい。何とかというか厳しい。

放課はいつもオタクグループの近くにいますが、話に加われない。組みを作るときは熱血グループの奴らと組むが、その情熱についていけない。てか若干キャラが被っている気がした。

どんどん厳しくなるクラス内での疎外感。オレはどんどん自分のキャラが薄くなっていくのを感じた。

これは一大事だ。オレは直ぐに己のこれからのスクールライフを改善するために二人を呼んだ。

下校時刻。

リュウと佳孝の三人で帰る時、早速オレは今の近況を言った。

二人も別々の教室のため、自分達の近況も織り交ぜながら話は進む。「つまり……要約すると、洋季は一年次に比べて比較的孤立していると。そして佳孝は完全に孤立していると？」

「失礼な言い方だな？僕は他人に興味は無いんだからこれでいいんだよ」

佳孝のクールぶりは、言い訳っぽさが全くない分、それはそれでどうだろう、という思いが走る。

「にしてもリュウは交友関係が広いからもう馴染めているんじゃない？」

「このクソリア充大魔王が！しね！もうホント不幸になりやがれ！羨ましすぎだぞ！てかオレがクラスになじめている相手がお前の女友達ってどんだけええええ！！！」

「そ、そんなに怒るなよ」

はん！嫌味を言われても言いかえさねえとはドンだけいい奴なんだよお前は！

「はっ！ いかんいかん、こんな奴を褒めたらオレの価値が下がる」

「洋季、そこまで言うか？」

龍介がさすがに少しキレた素振りを見せるが、問題ない。オレは空手道場所属だ。勝てる！

「家が空手道場なだけでしょ？」

そ、それでも一応空手学んでいるんだよ！

久しぶりに楽しい会話で下校できた。うん、実にいいことだ。

だが、結局オレのクラス内での孤立化対策は練れなかった。なにそれひどい。

オレは親友どもが役に立たないことを悟り、自分で動くことにした。まずは同じクラスメートに助言を求めるべきだったな、ふふ、我ながららしくない策を取ったよ。

クラスメートその1

バスケットマナーの一人、糸居沙良。かわいい系。

「え？孤立化してるっけ洋季くん？」

こいつは良くも悪くも空気の読めない天然少女なのだが、気軽に話せる人間なので困ったときはこいつを頼る。まあ頼られるときもあるがそんな時は大抵見捨てる。

「そういえば！洋季くんこの前私が頼んだ遠藤さんへの伝言忘れていたでしょ！マネージャー同士の伝言は大切だからあれほど頼んだのに」

「安心しろ。お前はいつも忘れているから大して支障は出なかったと思うぜ」

沙良がギャーギャー喚き始めたので、次行こう次。

クラスメートその2

野球部の豪腕スラッガー、倉知憲太。くらちけんた マッスル形。

「……………野球部に来ればいいじゃないか」

「論外」

暑苦しく勧誘してくるのでオレはダッシュで逃げた。

いやね、いい奴らなんだけどね。熱血漢で男らしいけどさ、オレのキャラが薄くなっちゃうから。

クラスメートその3

オタク研究会創設者にしてアニメ研究会会長でもある、高木和紀。たかぎかずのり デブ体系。

「それじゃあまずは軽くエヴァの映画を見ようか。話はそれからだ」

「オーケー、永遠に話は始まらないようだ」

全て大失敗。

オレのキャラを認めてくれる人間はこのクラスに存在しないのか？昼食時間になると、野球部はグラウンドへ、そしてオタク達はパソコン室へ。

オレは馴染むことができず、仕方がないので家から持ってきたティーカップに紅茶を入れながら窓の外を眺めていた。

紅茶にはそこそこうるさくてね、まあ温めたカップに入れるとか礼儀作法云々は一切知らないが、ダーズリンやアッサムティーなどと結構紅茶の数は知っているんだよ。

ウソだけど。

てかこれ市販のティーカップだけどネ。

「ね、ねえ、洋季くん」

やっべ、砂糖だと思ったら塩だww。

「聞いて欲しいんだけど。いい？」

しよっぺえww。あ、でも糖尿病にならずすみそうだな。

「ちよつと、ねえ！」

あえて無視するという美学。

「無視してんじゃねええよ！」

「すみませんでした」

少し無視しすぎたようだ。しかも女にしては結構ドスの聞いた声だな。

抵抗せず相手に従う、ふつ、これぞ生きていく上での大切な処世訓！長いものには巻かれるぜ。

オレはすぐさま土下座をしたため、相手はいいから顔を上げると言ってきた。

素直に顔を上げる。すると、全く知らない女子生徒が怒った表情をオレに向けていた。

「伊藤洋季くんだよな？」

「イエスイエス」

「…………設楽の友達なんだよね？」

オレの反応が気に入らないのか、相手は引きつった笑みの表情に変えた。

「龍介か？確かにそうだがそれがどうした？惚れたのか？告白したいからオレに伝言か？」

「違うわよ。でも、ここじゃあ言いにくいわ。ちよつと来て」

「だが断る」

「あ？」

やっだー、この子チヨー怖いんですけどー？

無理やり連れて来られて屋上へ。

一応立ち入り禁止区域なのに、この少女は何の躊躇もなく入っている。

すると、屋上でたむろっていた不良方が見える。

三人だ。一人は骸骨マークの入った眼帯のイケメン。こいつはリア充臭がしやがるぜ。

もう一人はサングラスをしてくわえタバコ。オレンジ色のド派手な頭髪がチャームポイントの背の高い男。

残りの一人はPSPの画面に見入っているスケ番らしき不良だ。

「っていつかスケ番って言い方古くねえかオレ？」

「なに変な事を唐突に言ってるんだよ？」

オレをここへ連れてきた女はオレにそんな文句を飛ばす。

そして、屋上においてあるには違和感のあるソファーに座って、オレを改めて睨んできた。

「まあ、この様子を見れば、私が何者かが分かるよな？」

「ああ、まさかアンタがこの学校の生徒会長だとはな」

「どこをどうみりやそう見えるんだよ！ちげえだろ！不良のヘッドだよ！か・し・ら！」

それにしてはなんとも愉快的ツツコミを入れてくれるキャラなんだろう。

まあそれは置いて、なぜオレはここに連れて来られたのか聞くかな。

「実はお前に頼みがあつてここに呼んだんだよ」

おっと、聞く前に答えちゃってくれたな。仕方ない、名前を聞こうか。

「私の名前は夜桜^{やおうのめ}乃之芽。この学校で番はつてる者だ」

「……………なあ、オレの周りには読心術のプロフェッショナルが揃っているのか？」

「何だかお前の考えて見えるんだよ。分かりやすい奴っていうか」
ふん、どうせ読心術の極意をばらさないための方便だろ？これだけ

らケチな奴は心が狭い。

「け！ケチじゃねえよ！お前が分かりやすいってだけだよ！」

「ふん、ならオレの今思っていることを当ててみる！そうだな……
なんでオレをここに呼んだんだ？」

「ああ、お前をここに呼んだ理由だな。それについては今すぐ話すよ」

「おお！すげえ！何でオレの思」

「実は、妹の恋路を手伝って欲しくてな」

やつべ、スルーされたww

「妹の名前は乃之亜^{ののあ}、この一年になったばかりなんだけどね……
中学時代からの思い人がいるのよ」

「え？オレ？」

「まあ中学の先輩として憧れていたんだけどね、それがいつしか恋心に変わったってやつよ」

「わお、スルーかよ」

「でもねえ、その相手が相手でさあ。まあ二年の奴ってだけで、それ以外知っている情報がないもんだから、恋の応援をしようにもできない状態だね」

「そのPSP何のゲーム？」

「……モントリ」

「モンスタートリック？やべえ、オレも好きなんだよね！武器は？
やっぱりハンマー？」

「……双剣」

「ああ！それもいいなあ、大海蛇倒した？」

「……まだ。どうやって倒すかわからない。どうやるの？」

「実はまず海賊船で誘い出して砲弾で攻撃をするんだ、それから」

「なにしてんだ？」

オレは頭をワシ掴みにされる。握力は推定70キロ。正直頭蓋骨にひびが入ったかも。

「聞いてたか？なあちゃんと聞いてたか？」

「ああ、とりあえずオレの意見だが、乃之芽とか乃之亜とかっていう名前はどうかと思うぞ？」

「そんなのうちの親に言え！関係ないだろ恋路とは！」

「それとき、君の名前教えてよ」

「え？………や、夜桜乃之亜です」

「ってあんたが妹さんか！い！あっはっはっはっは」

PSPをやっていた少女、もとい乃之亜と漫才を繰り広げていたオレは、乃之芽に熱い鉄拳をくらった。

「で？大体的内容は理解してくれたか？」

「はいはい、もちろんですよ姉御」

オレは青タンを右目にできた表情で笑顔を作る。正直泣きそうだががんばる。

「でも、ぶっちゃけ今更ですけど、何でオレを協力者に？」

「うん？いや、丁度教室内で声かけやすい男がお前だったのと、

あの設楽の友人だから、恋愛経験は豊富なのかなと………」

え？何言ってるの？経験0つすよオレ？まあいいや、相手は読心術のプロ、今ので分かってくれただろ。

「じゃあ、頼んだぞ！」

あれ？気づいていらっしやない？

「ちなみに………失敗したら、死刑な」

………あれ？いつ死亡フラグ立った？

表紙「思った事を直ぐ口にしない人は利口です」(後書き)

よ、よく最後まで読めたな。驚きだぜ。

更新は遅い可能性があるが、期待してくれるなら全力でがんばる。

P1「先生には従いましょう」

屋上だと、日の光をもろに受けることができて暖かいな。

オレは早朝からなぜか屋上にいた。いや、まあ、乃之芽に来るよう
に言われたからだけだね。

昨日は何だかんだで不良グループに入れられたが、うん、まあいい
や。

にしてもこのソファーいいな、新品だしふかふかだし。

「おい……………ここにはリーダーしか座っちゃいけないんだぞ」

なんだあ？小学生みたいな物言いをするやつは？

オレが目を向けると、あの眼帯をしている男が立っていた。

ていうか昨日は骸骨の眼帯だったくせに今日は花柄の眼帯をしてい
る。

正直違う意味で怖くなった。

「あの……………その眼帯は？」

「うつ……………め、目のことは、聞かないでくれ」

目じゃねえよ、その柄が気になっっているんだよ。

「そついえばさ、アンタ名前は？」

オレが朝食に持参してきたピッツアを食べながら聞く。

おい、ピザなんて発音するな！ピッツアだ！

「……………伊達希だ」
たてのぞみ

ぷつww伊達つてww独眼流ですか？ww

「うーうるさい！とにかくその席はリーダーのなんだから！どけよ
！」

けっ、甲高い女みたいな声出しやがって、うるさいったらありやし
ねえ。

「おい、政宗、こんな話を聞いたことがあるか？」

「政宗じゃない！希だ！」
まひむね

オレはこれまた持参のコーラを飲んでから、静かに話し始める。

「この話はな、かの有名な武将、豊臣秀吉の逸話なんだが……秀吉があゝの織田信長に仕えている時の話だ。寒い冬に信長が縁側に出ようと履物を履くと、それが妙に暖かかったから、近くにいた秀吉がその履物を尻にしていたと思った。だが、その事を言つと、秀吉はこう答えた。とんでもない、私は信長様が寒かろうと思ったのでこの胸で履物を温めていたのです………つてな」

「……で？」

「ようは、リーダーがこのソファに座る時、冷たい思いをしないようにオレが暖めているんだよ。お分かりかい？これだから伊達は困る」

「伊達は関係ないだろ！」

「たたく、どうやらこの政宗は女々しい性格みたいだな？ワーワーギヤーギヤーしやがって。」

「とりあえずここは話題を変えるべきだな。」

「そついえばよ、昨日もう一人背の高い男がいただろ？」

「はあ？………お前の目は節穴か？それとも性質の悪い冗談か？」

「お前こそ何を言っているんだ？」

政宗は相当癪に障つたらしく、さつきよりも喚き散らして叫んでいる。

全く、女のヒステリックみたいだな？オカマかこいつ？

「アリスはちよつと背が高いけど、れっきとした女の子だぞ！」

「え？あのおレンジ色の髪の毛でサングラスの？やっべ、これは予想外。てか外人だったのか？」

「ハーフなんだよ。でも傷つきやすい子なんだから、いいか？絶対変なこというなよ！」

「な」に、レディには優しいのが紳士のたしなみつてやつだろ。任せろ、アリスの前では絶対に男っぽいか！男だと思つてたとか！女の子っぽさがないとか！ぜつつつたいに言わねえから！」

「あの……聞こえてます」

おや、いつの間にか乃之亜ちゃんがいないか。

そして、その後ろに立っているサングラスで長身のアリスちゃん。ははっ、聞かれてんだ！

「……ま、まあ、男に間違えられているのには慣れているさ」

お、おお！クールにタバコを取り出しながら言っている。すげえ、かつこいい。

「……うぐ……ひっぐ」

サングラスの下から何やら雫がこぼれている。どうやらオレは最低な事をしでかしてしまった様だ。

政宗にボコボコにされて、ソファーからも引きずり下ろされた。

まあ、オレにも非がある。仕方がないさ。

「てめえ、今度デリカシーのない事を言ったら死刑な」

政宗め、女の前ではいいかっこか？ けっ！ イケメンは忙しくて大変ですね？

「お、お姉ちゃんはちよつと用事があるから、朝のミーティング始めちゃっていいよ」

ミーティングって、なんかやる事あるのかよ？

「じゃあ、早速だが、昨日から来ているこの最低野郎が、新たな助っ人になった」

なんか政宗がオレをけなしながら話し始めた。

「これによって、乃之亜の恋路のバックアップもよりやりやすくなった。というわけで、早速だが、なんか作戦立てる洋季」

政宗がなかなかのキラーパスを出してきた。おいおい、いきなり振るなよな。

まあいい、とりあえず情報収集といくか。

「ところでさ、乃之亜ちゃんは一体誰が好きなんだい？」

「え、えっと……じ、実は名前は分からなくて」

「どんだけ」

オレはまた政宗にど突かれた。

「ごめんごめん……じゃあ、何組とか分かる？」

「……………いえ」

「容姿的特長は？」

「えっと……………背は低いけど、かつこよくて……………一匹狼みたいな、クールな人です」

「ワツカンネ」

「諦めるの早すぎだろ！」

おいおいおい、政宗、さすがにこれはないだろ？

こんな乏しい情報じゃあ相手が誰なのかすらわっかんねえよ。全く、制服だったら名札があって楽なのに、これだから私服校は困る。

あ、ちなみにオレは制服。兄貴のお古です。

「なあ乃之亜、その好きな人はどんな服を着てるんだ？」

おお、政宗グツジョブ。

「え？……………一応私服ですけど、黒色が多かったです」

黒服でクールって根暗じゃん。しかも一匹狼？孤立じゃん。

コイツは相当ヘビィな恋路になりそうだぜ。

「とりあえず、洋季、お前ひとつ走りして見つけて来い」

「いやいやいやいや、何をおっしゃいます政宗さん」

「政宗じゃにやひ……………じゃない！希だ！」

「プツｗｗｗｗ囃むとかｗｗｗｗワロスｗｗｗｗ」

本日二度目の青タンを食らったオレは急いで屋上から逃げた。

時刻は早朝から二時限目となりました。

一時限目はお昼寝の時間なので、今から行動しようと思います。

「うおおおお！！先生！先生！オレの鬼の手が暴れそうです！トイレ行ってもいいですか！？」

「よし、保健室に行け」

ふふ、現国の真田^{さなだ}ティーチャーは見た目が神経質な男だからな、オレの言い訳にまんまと引つかかったぜ。
そんな訳で、とりあえず嫌ではあるが、我が校の生徒^{もつら}データー全てを網羅^{もつら}しているリア充大魔王の元へでも行くかな。

やって来ましたリア充大魔王こと設楽龍介の教室です。

まずは侵入するに従い、教師が誰かを確認します。どれどれ？おお！英語のマイケル先生か！あいつは話が通じないから適当に英語喋ってりや行けるぜ！よし！

「ハ〜イ！ハローミナサン！」

「オウ！ミスターヨーク！ハウアウユー？」

「イエースイエースハッハー！トコロデリア充キングドコイル？」

元気に返してくれるマイケルはほつといて、お！後ろの席に龍介^見。

「ばっ！何しに来たんだよ洋季！」

「シャラップ、ユー・アスク・マイ・クエスチョン、オーケー？」

「……………すまん、ちよつとその日本語は難しい、もう少し分かりやすく言ってくれ」

「最近気づいたんだが、お前はオレ以上にキャラが濃いぞ」

「い、いいから要件を言えよ！」

「そうだったな。単刀直入に聞くが、この学年に背が小さくてクールな一匹狼、黒服をよくきる、つてな感じの男子生徒は何人いる？」
「……………該当はしめて5人だ」

「すげえ、何で即答できるんだよ。その記憶力別のところで使えよ。」

「じゃあそいつらのリストをくれ」

「ちよつと待って……………はい、龍介フレンドリスト、詳しい情報が書いてあるから無くさないでよ」

その前に何でお前はこんなものを持っているんだろうな？疑問で仕方ないよ。

「よし、じゃあお返しは鉄拳五発免除な。ところで今から三十発近

く殴りたいんだがいいか？」

「よくない。いいから早く教室でないと生徒指導部の東雲先生来ちゃうぞ？」

「ふむ、そうか。じゃあグッバイ、アディオス！」

オレは最高にカッコイイ笑みをクラス全体に向けながら教室のドアへ向かった。

何だか皆呆気にとられているが気にしないぜ。

さあて、早く教室を出て”

「待て」

「ズシヤアアアア！！！」

オレが華麗に走ってドアから出ようとしたら誰かが足を掴みやがった。

おかげで顔面から地面とキスしちまったが、なぜか唇より鼻が痛い。

とりあえず足を掴んだ無礼なやつに説教をするか。

「何しやがるんだてめええええ！！」

「文句あんのか？」

「ハッ！貴様は政宗！？」

本日三度目の政宗鉄拳をくらった。しかも大ダメージを受けた鼻に入った。オレ死ぬかも。

「貴様に常識はないのか！！授業中にいきなり他のクラスに入るとは！傍若無人極まりないぞ！」

「はいはいサーセン」

こっから先の記憶は何故か無い。オレはいつの間にか廊下の隅っこでボロ雑巾になっていた。

とりあえず、リストは手に入ったので三時限目も授業は放棄しつつ該当者回りに行く。

あ、待てよ？この際一年の教室に行って乃之亜ちゃんに確認を取ってからそいつに直接アタックするか。

オレはスキップしながら一年の教室へ向かう。

そして、一年の教室がある階に着いてからようやく、乃之亜ちゃんの教室を知らないことに気づく。

まあいい、手当たり次第に行こう。

まずはA組から。さて先生は？…………ふむ、あれは居眠りの暮五郎^{ムジロウ}。

いつも寝たような姿勢で歴史の授業をする先生だ。近くにコナンらしき小学生が目撃された事例もある。まあ特に怖くないが静かに教室へ入ろう。

オレは後ろのドアを蹴破って侵入した。

全員が後ろを振り返る。だがすかさず隠れ蓑の術。オレはカーテンに身を隠す。

「…………おや、人がいたと思ったんだがな？」

「センサー、早く続きをお願いします」

ふつつふ、暮五郎も後輩生徒どもも気づいていないようだ。さすがオレ、完璧。

「…………あの、洋季だね？」

なん…………だと？

誰だ！？この華麗な術を見破った奴は！

「え？…………あ、アリスだよお」

な、何と。貴様がアリス！…………誰だっけ？

「…………ひどい…………朝会ったばかりなのに」

え？いやだって、なんか目の前の席に座っているこの美少女が？あの背が高いアリス？

「び、美少女って…………じよ、冗談は止めて下さいよ」

確かにオレンジ色の頭髮は一緒だ、だが今は何故かアリスが絶世の美少女にしか見えなかった。サングラスを取ったからか？それだけなのだろうか？確かにそのきれいな瞳と、素顔があらわになった為に、より美しい人だと感知はできた。だが、それだけだろうか？透き通った優しい声、どうもあどけなさを感じさせる屈託の無い話し方、まるで頭から足の指先まで、全てが可憐で、艶やかで、見るも

の全てを魅了させる何かがあった。これがまさか朝会った子だとは、さすがのオレも気づけなかった。

「~~~~~！そ、そんなに褒めないでくださいよ！で、でも………ちよつと、言われた事のないことばかりですから、その……胸が、ときどきします………あ！でも！ときめきじゃないですよ！………た、多分ですけど、って！わ、私何言っちゃってるんでしようね！？」

「さっきからごそごそ喋っているのは、お前だ！咲根アリス！」

「え？いや！違うんです先生！ここに洋季先輩が」

暮五郎に指をさされたアリスは必死に後ろのカーテンに指をさした。だが、もうそこに、アリスがいると思っていた人物はいなかった……マルツと。

ははは、いち早く教室を出といてよかったよ。危なく名探偵暮五郎先生にいた事がばれる所だった。あとアリスごめん。君が一年だとは思わなかった。

何だか今謝る所そこかよ！って聞こえたけど、まあいいや。

さて、先ほどの教室にはいなかったし、次行こう次。

やばい、この教室には、先生ランク鬼レベルの奴がいる。レベルの説明をすると、鬼は武器を持っている先生の事をさす。しかも厳しい先生なので怒らせれば命は無い。ちなみに東雲先生は悪の大王レベル。

話を戻すが、この教室にいるのは、生物教師の桜田^{さくらだ}。女の癖に生物教師ってのはなかなか珍しいが、いつも変な薬品を常備持っている。この前かけられた薬品は硫酸だった。マジでやばかったよ。

さて、どうしたものか………よし、今度こそこっそり入ろう。

オレは後ろのドアをそうつと開けて、素早い身のこなしで教室に侵入した。

桜田はまだ気づいていない、よし、このまま後ろの席の奴に声をかけよう。

オレはポケットから定規を取り出して、後ろの席で睡魔と闘っている男子生徒をターゲットにした。

ゆっくりと近づいて、まずは定規を素早く首の頸動脈に当てる。

「うお!？」

「静かにしろ」

「ヒッ!……お、お願いです!命だけは!」

「まあまあ、お前はオレの質問に答えればいいんだ。夜桜乃之亜はこの教室にいるか？」

「え?は、はい!一番前の席です!」

「え?……うそ?」

オレが目を向けると、何という事だ。マジでまん前にいやがる。これでは近づくに近づけん。万事休す。

「ふむ、どうしたものか」

「あ、あの……もう放してくれませんか?」

「まあまあ、とりあえず眠っててもらおうか」

「そんな!話が」

オレの手刀は見事に決まり、男子生徒を眠らせる。

そのままこいつの席をのつとり、さあ作戦を練ろうか。

「おい、一番後ろの貴様は誰だ?」

「ふ、このオレを知らないのか?ならば教えてやろう!オレは伊藤洋季だ!」

「洋季か、ちょっと待ってろ、今ヒ素を微弱成分に変えた劇薬を持ってきてやる」

「さいなら!」

オレがダッシュで教室を出ると、何と桜田も追ってきた。こいつ、陸上部顧問だけあって俊敏な動きだな。

「そのポニーテールは伊達じゃないって事か」

「ポニーテールは関係ないだろう?」

ふむ、クールな表情にクールな物言い、東雲先生よりは可愛げがあるな。

「お前に褒められても嬉しくないな」

「まあまあ、東雲先生よりは、っていう評価なんですから、皮肉み
たいなものですよ」

「……………そうか、どうやらお前は自爆スイッチに手をかけてしまっ
たようだな」

ふん、何をわけの分からない事を。

「洋季。後ろを見てみる」

「ん？」

オレの後ろには本気で怒った表情をしている不動明王、もとい東雲
先生が直立していた。

だが！これ如きで折れる洋季様ではない！

「先生は美人で可愛いですよ！もうね！ショートカット最高！ほら
！背も高くてモデルさんみたい！スレンダーだし！胸もあるから彼
氏がたくさんいすぎて困っちゃうくらいでしょ！」

「生憎だが……………今まで交際した異性はいないんだが？」

「はは、ですよね」

「だが、ここまで突き合った男は、お前一人だけだぞ洋季」

「ご冗談を、先生が一方的に突き刺しているではありませんか」

オレは頭をかきながら軽やかに笑う。そして次の瞬間、三階ではあ
るが窓を突き破って外へ飛び出した。

「ガシッ」

おっと、首根っこ掴まれた。

「危ないぞ洋季？三階からではいくらのお前でも怪我をするぞ？」

「怪我で済まさせてください」

「断る。とりあえず反省室に来い。たっぷり可愛がつてやる」

「わーい！人生オワタ」

オレは翌朝、校庭の木に吊るされた状態で朝を迎えた。

危うくお天道様にも迎えられそうになったが、龍介と佳孝に助けて
もらった。ありがとうお前ら。

P1「先生には従いましょう」(後書き)

感想待ってます。

P2「生徒会の権限は程々に」(前書き)

P2「生徒会の権限は程々に」

まあいろいろとありまして、またまた朝の屋上でソファーに寝そべっている洋季です。

「おい、昨日は午後の活動サボリやがって、それと私のソファーに座るな」

お、昨日はいなかった乃之芽が来ました。そういえばあなたは何組ですか？

「あ？三年B組だが？」

「金八きんぱちせんせ〜」

「うるせえよ」

ふむ、まさかの先輩だったとはな。ていうか受験の年なのに妹の恋路を応援してていいのか？

「勉強はしっかりやってるからいいんだよ。どうせ推薦だし」

「不良の癖に頭良いとかなにそれ？」

「お前は授業妨害しまくって我が校のブラックリストナンバー1に居続けている問題児だろ？むしろなぜ退学にならない？」

それは天才ゆえの所業だからさ。

「正直に馬鹿だからって言えよ」

「そんなことより、この5人のリストを見てくれ」

「ん？なんだこのパツとしない根暗5人組は？」

ひでえ言いようだな、まあ同感だけど。

「その中の一人がおそらく乃之亜ちゃんの片思いの相手だ。で？本人は？」

「ああ、クラスの代表委員だから今は来れない」

「スケ番みたいなオーラだったけど普通にいい子なんだね。姉がこんなだとかわいそうだよ」

オレは持参の朝食であるステーキセットドリンク付をミニテーブル

の上にセッティングして優雅に食べ始める。

「いいからソファーからどけよ」

乃之芽がミニテーブルを蹴つ飛ばす。クソッ！オレの朝食が！
だが何気にステーキだけは素手で掴んだので無事だ。うん、手掴みでもうまい。

「お、おい、絶対にソファーを触るなよ？絶対に触るなよ！その脂ぎった手で触るなよ！！」

「それはネタフリだな？要は触れてことだろ？いよっしゃあああああ！！」

「さわんなつつたろおおおお！！」

乃之芽の回転後ろ蹴りがオレのあごにヒット。危なく外れ掛けたがこれぐらいどうってことない。

「ひはんはほへえ」

「す、すまん。でも触るなって言っただろ！」

ふん。女なら謝ればいいとも思っているのか？とんだ甘ちゃんだな！

オレは自分のあごを殴りつけて異常を治す。

「オレに謝る気持ちがあるんならメイド服を着て」ごめんなさいご主人様”って言いながら上目遣いするんだな」

「全く無いからしないでいいだろ」

ものすごく残念ではあるが無いなら仕方ない。

「そうだ、政宗はどこ行つた？」

「政宗？………希か？希はまだ来てないな？」

「ふっ、オレに恐れをなして逃げたか！」

オレのかっこいい台詞のあと、不快なでかい音をたてて屋上のドアが開かれた。

「ようきいいいいい！てめえ昨日アリスを弄^{もてあそ}んだだろおおお！！」

政宗だ。本日は柴犬のアップリケの眼帯での登場です。

しかもものすごくキレていらっしやいます。見間違いであることを

祈りたいのですが木刀を所持しております。

「ヘイヘイ落ち着け政宗、オレはアリスにちよっかいを出した覚えは無い。つまりお前の勘違いだ」

「政宗じゃない！希だって言っただろおおお！！」

めっちゃ木刀を振りかざして切りかかっています。冗談抜きで死んじやいます。

だがしかし、私の華麗な動きで避けてしんぜよう！はああっ！

「バキヤア！！」

しまった。避け損ねて背骨をぶった切られた。

「おいおい、お前全然華麗に避けてねえよ。むしろ無様にも当てられに行ってたぞ」

乃之芽がなにやら言っているが、ソファーにくつろいで座っている所を見ると、助けようとする気はさらさら無いようです。

よし、逃げましょう。オレは華麗にダッシュを決めてゆつくりと背中をかばいながら足をずった。

「どこが華麗なダッシュだよ。完璧落ち武者歩きだろ」

全く、本当に乃之芽はうるさい。何もする気が無いなら黙ってる！

「洋季……まだ制裁はおわつとらんぞおおお！！」

制裁が終わる前にオレが終わりそうだよ。

さすがに死にたくは無いのでドアをすぐ開けて階段を転げ落ちながら下りる。というか本当に転げ落ちてる。

後頭部や背中など全身を強打しながらも、走っている政宗より格段に速い。

オレは体の健康を犠牲にして一階までノンストップで降り立った。

「ちょ、ちよっと、あなた大丈夫？」

見知らぬ心優しい生徒が暖かい声をかけてくれる。だが心配ご無用。多少頭から流血してはいるがそのくらい何とも無い。オレはピースをしながら駆け足で去った。

保健室です。ここに来て治療をします。

頭の流血や全身の複雑骨折もこのベットで寝れば回復します。

「いやいや、回復するのは洋季君ぐらいだよ」

このメガネをかけた優男が学校保健医です。腕は確かなブラックジャックです。

「また東雲先生にでもシメられたのかい？」

「いえね、今回は政宗にやられたんですよ」

「政宗？………うん、そんな子いたかなあ？」

「そう言えば自称希とか言っていましたね」

「いや、それが本名なんだよ。希ちゃんかあ、確か生徒会に誘われたけど断ったあの子だろ？」

はあ？なに？どんだけあの不良軍団は優秀揃いなんだ？ていうか木刀持って振り回す奴を生徒会につて、馬鹿じゃねえの？

「どうせまた口くでもない事をしたんでしょ？」

「いえね？先生は保健の先生だから話すんですがね、まず不良のヘツド夜桜がね、己の妹の恋路を応援しようとしてましてね、その助っ人として私が選ばれたんだが、他の仲間がいかにせん役立たずでね。まあ政宗は怒りっぱいし、アリスは素直だし、どうも自分勝手に動く人が多くていけねえや」

「つまり全ての元凶は助っ人に君を選んだってことかな」

ほお？爽やかな笑顔で言うこと言うじゃねえか？言つとくがオレは強いぞ？

「まあまあ、そんなケンカ腰にならないで。ところで、君は何を手伝ったんだい？」

「まずは本人すら片思いの相手の名前を知らないのです、その特定のためリア充の龍介に情報をもらって、今本人に確認をしてもらえば、意中の相手がわかる段階ですが？」

「………思ったよりも働いているんだね？」

「そうなんだよ！なのにあいつら邪魔ばかりしやがって！こちとら命かかっているんだぞ！」

なにせ死亡フラグが立っていますから。

「…………でもまあ、君は常識のない子だからなあ」

「いいんだよ。どうせ常識なんてあつたつて、ピカソの絵は理解できないし、エジソンの素朴な疑問に対して真面目に答えることもできない。空を飛べることも気づかなかつただろうし、宇宙に行けることだって気づけないだろ？常識なんてみんな持っているんだから、オレぐらい非常識を持ってなきや人類は進歩できないんだよ」

「そ、その考えには感服せざるをえないな」

ふふ、どっかの本の受け売りを言っただけなのに、こいつマジで尊敬してるぜ。

さあて、丁度休み時間だし、乃之亜ちゃんの教室にでも行きますか。

さて、一年生の階に来ました。

そのまま乃之亜ちゃんの教室へ進みましたが、残念、本人は教室に不在です。

仕方なしにフラフラしようと思います。スケボーで。

「いえーい」

勢いつけて滑ります。なんだか後輩生徒を何人が轢いちゃってますが、どうせスケボーなので大丈夫でしょう。はっはー！オレを止められるなら止めてみる！

「あ！危ない！」

「どつぶしやあああああああああ！」

曲がり角で現れたオレンジ色頭の少女にドロップキックをくらいました。危ないつてオレが危ないよ。

顔面がメキョって言っただけどオレ本当大丈夫かな？

「あ！洋季だ！」

「ふ、その声は不思議の国のアリスか」

「不思議の国は要りませんよ」

冷静にツツコムな。というか元氣ないな？どうした？

「どうしたもこうしたも！洋季が昨日私に濡れ衣をかけて逃げちゃったのが悪いんだよ！その所為で私生徒会に入れられそうなんだか

らね！」

「何がどうなって生徒会に入る羽目になるんだ？」

「碁五郎先生は生徒会顧問だから、態度の悪い私に監視をつけるために生徒会に入れようとしているのよ。そりゃあ隠れてタバコ吸ってたりするけど、私の国では法律的に問題ないし、それにちよつとしか吸ってないから問題なかったのに、昨日のドアを壊したのだから私の所為になっちゃったんだからあ。責任とってくださいよ！」

「ごめん。もつと短くして言つて」

「だからあ！洋季の所為で大変な事になっちゃったから責任とつて！」

「なんと甘美な響きだろう」

アリスが泣きはじめた。殴られるよりも辛い反応なので慌ててオレは謝る。

「なあに、要するに生徒会に入りたくないんだろ？ちよつと待つてな、こういう時に役立つ奴がいる」

オレはそう言つてアリスを連れて生徒会室に向かった。

特別に生徒会にだけ支給された生徒会室はそりやもう広い。

じゆうたんが敷かれているし、絵画がかけられているし、テレビはハイヴィジョン、パソコンも設置されており、もはや普通ではない豪華生徒会室がオレの目の前に広がる。

「全く、何度来ても見る度に身震いするぜ」

「よ、洋季と同じ気持ちになるのは何か変だけど、私もそう思う」
アリスもこの部屋の異常さに顔が引きつっていた。

「こんなところで一年間、生徒会役員として拘束されたら、流石のオレでも身が持たんな」

「い、いやだよ、生徒会に入りたくないよ」

アリスがオレの腕にまわりついてくる。まあ感触がバツチグーなので問題ナッシング。

「おやおや、ここに来てイチヤイチヤするバカップルは誰かと思ひ

きや、洋季君じゃありませんか」

おやおや、誰かと思いきや、我が校の生徒会の会長をしている勝浦かつうら春はるではないか。相変わらず優等生が板につくねえ？

「か！カップルじゃありません！」

「そうだ。さしずめ例えるならばオレとこいつはライオンと猫の關係みたいなもんだ」

「え？遠い親戚？」

「洋季と血が繋がっていると勘弁してください」

二人とも嫌に冷たいな、まあいい。

「早速だが春、オレに面倒を起こさせてもらいたくなくやこいつの生徒会入会を即刻取りやめるんだ」

「却下」

なんと！中学からの知り合いであるこいつが始めてオレの命令を無視した！

「君の命令に従った覚えは一度もないけどなあ？とにかく、碁五郎先生が決めたんだから、取りやめ不可能だよ」

「そうか……よし、アリス、諦める！」

「……ウツ、ヒグ……責任とるって洋季言ったくせに」

はいー！すみませんでした！もう一度がんばります！

「頼む春！この通りだ！」

オレは胸を張った。

「どこに君の誠意を感じればいいんだ？」

くそ！だめか！こうなれば！

「ぶつちやけ生徒会を壊滅させりやあ入る入らないなんて話もなくなるんだ。まずは手始めにここの生徒会室を破壊させてもらうぜ」

「副会長」

はっ！殺気！これは！？

突如としてナイフが飛んでくる。さすがに刺されば死ぬのでオレは真剣に避けた。

「わあ、洋季って意外と早く動けるんだね」

この夢見る少女アリスは何をのんきに言っ
てやがる。まあぶつちや
け奇跡的に全部避けれたんですけ
どね。

「洋季様、申し訳ございませ
んが、会長の命令ですので」

むむ！そなたは副会長の皐月美恵！
オレと同じくらいむちゃくちや
なキヤラで有名な美少女じゃないか！

「副会長、この子はアリスちゃん。
うちの新しいメンバーだよ」

「え？いや、まだ決まったわけじゃ
ない」

ほっほ、どうやらアリスを無理やり入
会させる魂胆のようだな？

「やれやれ、春、おいたが過ぎるよう
だな？」

「今の君に何ができるんだい？アリス
ちゃんはうちのメンバーにな
る、これは覆せないことだ」

はっはっは、いい気になった顔で笑う
お前は、さながら道化師だな。

「いや、道化師は君だ。それだけは間
違いない」

ふん、今更そんな苦しい言い訳など見
苦しいだけだ。

「春、お前はオレを甘く見すぎている。
オレの恐ろしさを再度思い
出させてやらんとな」

「そんな事、させませんよ！」

副会長の美恵が今度は薙刀なぎなたで襲い掛
かってきた。いやもう本当コイツ何
もんだよ？

オレは太刀を懐より取り出して応戦す
る。

「洋季だつてそんなもの何で持つてい
るの！？」

アリスのオレを応援する声が聞こえた。
うん、がんばろう！

太刀は綺麗に空を切り、薙刀を真つ二
つにした。

「くっ！ではこれをくらいなさい！」

美恵は今度はショットガンを取り出す。
だが、オレのハリセンによつてはたか
れた。

「でわっ！こちらを！」

サブマシンガンか、もう本当にもんだ
よお前？オレは輪ゴムを飛ばしてそれを
弾く。

「非常識なっつ！これでもか！」

今度はバズーカー？おお怖い怖い。オレはデコピンをして美恵を眠らせる。

「はうつ！……会長……申し訳……ございま……せん……でした」
美恵は力なく倒れる。その刹那の最後まで主を思うとは……………。

「敵ながら！天晴れなり！！」

オレは扇子を取り出して天にかざした。

「ここまで非常識な戦いは初めて見ました……………」

ふふ、アリスがオレに熱い視線を送っている。

まあこれはほんの序の口、生徒会滅亡への一步に過ぎん。

「今度はどんな非常識で攻めるんだ？」

ふふふ、春がとうとう根を上げて諦めの境地に至っているぜ。

まあ待つてな、すぐにでもケリをつけてやる。

オレはとりあえず生徒会室を出て奴ら呼びに行った。

「いや！奴らつて誰だよ！？」

春の断末魔の叫び声を背に、オレは政宗＆乃之芽を探した。

「ええっ！？二人を連れてきてどうするの？」

「あ、ごめんアリスちゃん、副会長を運ぶから足持つて」

「え？あ、はい」

「仕方ねえな、オレも手伝うよ」

オレはそう言つて春と協力して美恵を生徒会室にあるソファに運んだ。

「つていうか何で普通にいるんですか！？二人を呼びにいったんじゃないんですか！？」

夢見る少女アリスがまた何かを言っているが、オレには関係ないな。

「大有りですよ！私の生徒会への入会阻止はどうなるんですか！」

「それなら無問題。五秒後に二人がこの部屋にくる」

「は？」

五秒という時間は、アリスが驚いているうちにあっという間に過ぎる。

そして生徒会室のドアが何者かに破壊された。

その破壊音にアリスが驚いて振り返ると、オレは瞬時に春の背後に回る。

ドアの前で姿を現したのは、もちろん最強最悪極悪コンビ。

政宗&乃之芽が目を光らせてこの部屋に足を踏み入れてきた。

「え？なに？なに？」

ふっ、常人のアリスでは理解すら追いつかないこの超展開。

そうだな、一言で言うならば、オレは嘘について二人をここへ連れてきた。

そう、シンプルで、かつ、単純明快な回答。

二人を煽^{あお}った。これがこの世界の結論だ。

「意味わかりませんよー!!」

悲痛なアリスの叫びが聞こえる、だが、もう物語りは止まらない。

「政宗！乃之芽！アリスを監禁しようとしたのはこの生徒会長の勝浦春だ！存分にいたぶってやれ！あ、後この部屋をきれいにして我が部室にしよう。恋路応援倶楽部って名前にしてな！」

「「オウー!!!」」

イエイ、ナイスお返事！

次の日から生徒会は学校から消えた。

いや、正確には、生徒会は恋路応援倶楽部へと変貌を遂げた。

部長は夜桜乃之芽。副部長に政宗。会長は春。副会長は美恵。

そして、このオレ伊藤洋季は、参謀長官という役目をもらったのだ。いえゝい！生徒会との合体だぜ！

アリスは相変わらず泣いているが、お母さん、アリスは元気ですよ。

P 2 「生徒会の権限は程々に」 （後書き）

この小説は、文学のような高尚な文章も描写も何一つなく、ただ主人公が暴れる様子を淡々と綴^{つづ}った小説です。悪ふざけに付き合える心の広い方に読んでいただければ助かります。

あ、これはむしろ前書きに書くべきものだったか！

P 3 「伊達政宗との付き合い方」(前書き)

え？伊達希の性別？ それはシークレットワードです。

P3「伊達政宗との付き合い方」

生徒会室は校舎の一番上にある部屋だ。それゆえ、窓の外の景色はそりやもう絶景の一言。

オレはミックスバナナジュースカクテルを作りながらその絶景を見下ろしていた。

お酒とバナナジュースをシェイクするこの動きは、言わばお客様へのパフォーマンスでもある。

オレはシェイクを済ますと、洒落たグラスに注ぐ。

「ラ・ミクジエーラです」

「どうもです」

前回、オレと互角な戦いを繰り広げた少女、副会長の美恵がカクテルを受け取る。

「……………おいしい」

お客さんのこの台詞が、バーテンダーをするオレへの一番の報酬であると、オレは改めて実感した。

「あの、何しているんですか？」

もう一人の客、乃之亜ちゃんが困惑した表情をこちらに向ける。

「なるほど、お客様も酔いたいのですね」

「え？ いや、未成年の飲酒は禁止ですよ！」

彼女の心にあつた重圧が、今の言葉を吐露させる。

がんじがらめにされた鎖の解き方もわからず、がむしゃらに動いた結果、彼女の全身は傷だらけだ。

「どうぞこちらへ」

オレは自作カウンターに彼女を座らせる。

「え、あの、聞いてますか？」

まだ警戒心を解いてくれないようだ。いや、彼女はまだ他人に心を開いたことがないのだろう。

他人への接し方を忘れた彼女には、熱いアルコールがneededようだ。

「あの、ですから、飲酒は」

「お嬢さん、どうやらこの店は初めてのようですね？」

そう言つてブランドーを飲んでいた紳士が、彼女の隣にきた。

「お隣、失敬します」

「え、あの、会長さん。あなたも飲酒ですか……」

勝浦春……彼も現代の戦いに傷を負つた男だ。

聡明と謳^{うた}われたかの頭脳は朽ちて、今や酒飲みとして日々を送っている。

「いやいやいやいや、会長さんしつかりしてください」

「お嬢さん……ウオツカを頼みなさい」

「却下です」

なるほど、ウオツカとキャツカ……駄洒落か。

「違いますよ！」

真つ赤になつた彼女は、睨み付ける様にオレを見る。

どうやらウオツカストレートがお望みらしい。

「は？」

「では、こちらです」

オレはウオツカの酒瓶を片手に、彼女の前に差し出した。

「飲みませんよ！」

そう言いつつも、彼女は酒瓶に手を伸ばす。

「伸ばしてません！」

彼女はカップに注ぐどころかそのまま瓶に口をつけて一気に飲む。

「しません！」

彼女は浴びるほど飲んだ。ていうかマジで浴びた。

「やめてええええー！」

「ドスッ！」

アリスの顔面パンチがオレにクリーンヒットする。

「意味のわからないいじめはやめてよ！」

アリスマジギレ。はいはいサーセンした。おゝい、二人もやめてい

いぞ。

「なんだもう終わりか」

「でもからかうのは面白かったです。またやりましょうね」

生徒会メンバーは黒い笑みを浮かべながら乃之亜ちゃんを見た。そして涙目になる乃之亜ちゃん。

「ところで、この五枚のリストを見てくれ」

オレはようやく恋の進展に入ろうとあのリストを見せる。

「何か先生に追いかけられたり政宗やアリスと遊んでいたらすっかり遅くなったが、その五人のうち誰かが好きな人だと思われる。写真があるからそれで判断してくれ」

「えっと……………あ！この人です！」

うん？どれどれ。

オレがそのリストを見ると、なぜかよく知っているあいつが載っていた。

「お、おいおい、こいつはまさか！」

オレはこいつを知っている。とてもすぐよく知っている。

同じく行動をした日もあれば、共に苦楽を味わった仲な気もする。

よく顔をあわせていて、非常に親しいコイツは！

「えっと、ほら、その……………やっべ、本当は知らないかも」

「名前は……………黒三沢……………佳孝？」

「そうだ！黒沢なのか三沢なのかはつきりしないあいつだああああ！！」

よもやオレの親友が恋のお相手だとはな。

オレは内心からあふれ出る驚きをグッとこらえ、気を落ち着かせるためにブレイクダンスをする。

ヘッドスピン10回転で何とか頭を冷やした。

「あの、落ち着いてください」

乃之亜ちゃんがおそろおそろそうツツコムが、大丈夫、オレはもうクールだ。

「さて、これでお相手がはつきりしたし、ていうかオレの知り合い

「だし。このままズバツと決めちゃいましょう！」

オレはそう言って部屋を出ようと走り出した。

「ガチャ」

「ごめんごめん、午後の活動始まつてる?」

なんと、ここで政宗入室。ていうか走り出したオレはもうどうにも止まらない。

「はっ！てめっ！洋季！？」

「マジで衝突3秒前」

勢いよく全身での衝突が起きた為、政宗は廊下に仰向けに倒れる。その上にオレが倒れこみサンドイッチ。

おいおい、どうせならつる若き乙女とこついったシチュエーションにおちいらたかつたぜ。

.....

政宗から返事が無い。屍にでもなったか？

オレが寝転ぶ政宗の顔を見してみる。

「ばっ！？！？顔がちけえよ！！」

真つ赤になつて叫ぶ政宗。なんだ？純情君気取りか？

「どけっ！不潔！色情魔！」

ふっ、オレに倒されたのがよほど悔しいらしい。

どうだ？押し倒された気分は？

「お、押し倒してっっっ！っるさいだみやりえへ……」

プッ
W
W
噛む
とか
W
W

「このっ！ばっ！っが！……どけええええええええええ！！！！！」

政宗、懇親の一撃が我が鳩尾みぞおちにきれいに入る。

「ぐふう……いい拳だ、政宗」

政宗の上に乗つていては殺されるといふ早く感づいたオレは体を小刻みに震わせながらどいた。

「希だばっつ——か！！」

瞬時に立ち上がり、勢いよく走り去りながら捨て台詞をはく政宗。
ふっふっふ、ここまで情けない醜態をさらしたのだ、こいつの女子

からの好感度はがた落ち間違いないな。

「洋季サイテー」

「さすがに……酷過ぎます、洋季さん」

「洋季、ろくな人間ではないと思っていたがここまでとは思ってませんでした」

「死ねカス野郎」

アリスから順に乃之亜ちゃん、副会長、そしてアホ会長がオレに侮蔑の視線を送る。

どうやらオレの方が好感度が落ちのようだ。ふふ、何でだ？

だがそんな事を気にするオレではない。オレは目から汗を流しながら四階窓を開けて飛び降りた。

「わあああああ！ごめん言い過ぎた洋季！だから早まった真似は！」

アリスがなにやら叫んでいるが、オレは自前のパラシュートを既に開いて一階地面に着いていた。

「死ね非常識やろおおおおお！！」

アリスから最大の褒め言葉を頂いた。

さて、一時の感情の高ぶりによって、つい四階からスカイダイビングしてしまった。

でもまあ教師勢から逃げる時よく使う手段なので別段どうともない。いやしかし、政宗は思ったよりも強敵と見える。

眼帯をしている痛い野郎だと思っていたのに、どうも人気がある。ぎる。

まあそりやめっちゃ美形なのは認めよう。

ちよつと甲高い声だが透通っていてきれいだ。

オレへの攻撃やそのスタイルからして運動もできると思われる。

しかも度々女子の集団に追いかけている光景も目にする。

そして逃げている政宗に『こっちだ！』と嘘の誘導をして女子の巣屈へ追いやった事もある。

あ、違う。これはオレの行動だった。

まあ要するに、龍介だけだと思っていたリア充キングは、意外にももう一人いたってことだな。

しかも龍介よりは頭がいいだろう。まあ龍介が異常だという面もあるが……。

だが、このままでは可愛い女の子が全員取られてしまう。

そしてあいつらの周りにハーレムができる。

龍介はきつとこう言うだろう。

『ああ、女子は本当にうるさいな。付いて来るのもいい加減にしてほしいよ』

そして政宗もきつとこう言う。

『全くだな。女って言う生き物は本当にめんどろ極まりない』

そんな許せない言動をしているのにも拘らず、きつと女子達はやつらの周りにいることを止めないだろう……。

いや！このリア充どもはわかってているのだ！本当は女子が離れるわけが無いということ！

己の美に酔いしれ！周りの羨望に酔いどれ！女子の歓声に酔い乱れ！その上であえて”別に……”というクールを気取っているのだ！

「うおおおおお！！」

オレの体の中でモテない男の僻みひがと無念と邪心が渦中を造る。

そしてモテる奴らを激しく憎むエネルギーが生まれた。

「許すまじ！リア充ダブルキングううううう！！」

オレの雄叫びは校庭を走り、学校中に響き、街にまで届き、山を越えて、海を疾風のごとく渡り、風に負けず、何物にも負けず、果ては異国の地にまで到達しただろう。

まあそんなわけも無いだろうがな。

気が晴れたので校舎裏の花壇がある校庭に来ました。

学校を囲む塀を少しでも柔らかい情景にするために花を植えたようだが、残念ながらこんな辺鄙へんぴな場所に生徒はこねえ。よってオレの

秘密の場所さ。

あれ？秘密の花園ってやつ？なんかかつこよくね？

オレはいい気分で花壇を見ながら校庭を進む。

だが、どうやら先客のようだ。

かがみ込んだ後姿が見える。そして花壇を一心にのぞいていた。

意外だな。政宗だ。あのポニーテールというよりはストレートを縛っただけという後ろ髪。というかコイツは眼帯や後ろ髪を縛ったり名字が伊達だったり、政宗と呼ばれたいとしか思えない容姿の癖にそう呼ぶと怒るんだよな。

まあとにかく御本人がしゃがんだ姿勢で花を愛でているシーンに遭遇したオレ。

気まずいな。何がって男が花を愛でているシーンを見ているんだぜ。あれか？オトメンか？乙女のような男メシなのか？

まあとりあえず、オレは手頃な茂みに身を隠しながら政宗に近づく。こいつらは顔を見ればオレの思考が直ぐに読める読心術の使い手だが、顔さえ見られなければどうということはない。オレは聞き耳を立てるため、政宗の後方の茂みまで移動する。

「……………ハア」

政宗の口からはため息のみが吐き出されている。

おいおい、ここは独り言を言う場面だろ？早く言っちゃいなよ！

「……………洋季……………死なないかなあ」

最低だなオイ。

だが、どうも思い悩んだ様子で、重々しくそんな台詞を言っている。もしかして本気で死んで欲しいのか？それはひどすぎるぞ？

「……………政宗じゃ……………ないもん」

そこか？そこが一番嫌なのか？だったらせめて眼帯取れよ！あとキレた時木刀を持ち出すな。

しかし、どうも政宗を毛嫌にする傾向が強いな。

言っちゃあなんだが、政宗って褒め言葉じゃないか？

容姿端麗のイケメン武将。最近ではろくに歴史を知らない奴でも、

政宗かつこいい！と噂になるくらいだというのに。小説やアニメ、漫画でも主人公クラスのキャラだぞ？

それに引き換えオレはどうだ？

武將に例えるなら………なんだろう？

織田信長？でもオレそんなに残虐非道じゃないし。

豊臣秀吉？でもオレそんなに知恵が働かないし。

徳川家康？でもオレそんなに我慢強くねえし。

うーん、ここは一つ最後の最後で信長を暗殺した明智光秀にでもするかな。

なんて言うか信長暗殺とか非常識っぽいし。

決まったぜ。オレは明智光秀だ。

清々しい気持ちになったオレは隠れるのも馬鹿馬鹿しくなったので政宗の真後ろまで出てきた。

「おい、政宗」

「え？はああ！？…ばっ！何でお前がここに！」

「信長様を殺したのはワシだああああ！」

わしは正直に告白した。己の過ちを。

「……………は？」

政宗殿は驚嘆と怪訝な目をこちらに向ける。その表情から、どうやらワシの告白を信じられずにいるようだ。

「もう一度言おう……………本能寺に火を放ち、信長様を自害に追いつたのは……………このワシ、明智光秀じゃ」

ワシは、晴れ晴れとした心意気を不可思議に思いながらも、悪くないと思う。

信長が、果たして安寧の世のために天下を目指していたのか、ワシには見定め切れなかった。

多くの人を殺め、時には仏や僧侶相手でも、容赦なく刃を下ろした主君に、果たして民の笑顔を守れるのかどうか……………。

奇妙を好み、妖しさに魅了されていた、あの男に……………天下を取らせる事に、ワシは畏怖していた。

暴君が治める世など、果たしてあつてよいのか。

民の上に立つものが、殺生を好むものでよかつたのか。

気に入らぬもの、邪魔なものを力だけで握りつづす政でいいのまっくらだろ
うか。

ワシには、あの信長の全てが見えなかつた。本物の信長を見れなかつた。

見たいと思つた、だが！天下が降りてからでは遅いのだ！

「政宗！……ワシは、後悔してはいない」

ワシの希薄迫る様子に、事実であることを悟つた政宗の表情は、理解できない、とワシに語りかけているものであつた。

「民を……人々を、救うことを、天下をとる者はせねばならない。慈悲が必要なのだ……ワシは、信長にそれが欠けていると思つたのだ」

「いや、あの」

「ワシは、罪だと理解しておる。信長を殺めたことで、天下をとつたつもりも無い。むしろ、隙を狙い、戦うこともせず、火を放つた。要は、ワシは卑怯者だ」

「も……しも……し？」

「罪は認める。わしを殺すなり、好きにせい」

ワシは朗らかな表情を、自然に出せた。

それが、嬉しくもあり、滑稽でもあつた。

「うざい」

政宗の拳がワシの顔面を殴つた。わしは死んだ。

気がついたら、最初に青空が目に入った。

オレは上体を起こすと、政宗がヒザ枕をしていることに気づいた。

「す、すまん。ちよつと強く殴りすぎた」

どうやら責任を感じてオレを看病していたらしい。

だが、膝枕つて。

「ああ？地面に頭擦り付けてるほうがよかつたのか？」

「いえ、ありがとうございました」

ドスの低い声で脅してくる。似合いすぎる脅しの顔も効果抜群だ。

「それで？何で私を追いかけてきたんだよ？」

私って、キャラに合わないな。

「貴様は毎回毎回癪に障ることばかり言いやがって」

政宗が怒っている。だが勝手に人の心を読んでいるお前が悪いと言えよう。

「……………もういい。で？用があるのか？」

「ないな」

「……………曲がりなりにも謝りに来たとか無いのか？」

「謝るって？どなたに？」

政宗がこれまた長い大きなため息をついた。はてさてどうしたのでしよう。

「あのさあ、人を事故とはいえ公然の前で押し倒したんだぞ？なのに俺びの一つも無いのか？」

「政宗はプライドの塊だな。しかたねえ、謝ってやるからよく聞けよ」

「何で上から目線なんだよ」

政宗がオレの頭をはたく。結構強いが慣れてきた。

「すまん」

叩かれた後謝ると、なんだか妙な敗北感に襲われる。

「……………ん…許す」

頬を赤らめて政宗はそう言った。もしかやコイツサドか？Sってやつか？

「ばっ！赤くなんなってねえよ！」

そつえば、今日の政宗の眼帯は三日月のアップリケが刺繍されている。

毎日変わっているが、これを作っている人は相当刺繍がうまいな。女の鏡と言っても過言ではない。

「……………どうも」

ん？何で政宗が真つ赤になって返事するんだよ？

P3「伊達政宗との付き合い方」(後書き)

歴史ネタがちょっと多い気がするが、気にしないで行こう。

P 4 「廊下は走っちゃいけません」(前書き)

あらあゝ？すっげえラブコメムードなんですけど？

P 4 「廊下は走っちゃいけません」

生徒会室には遊戯がない。

というわけでオレは麻雀ボードを持ち込みました。さすがオレ、手際が良い。

「いやいや、どうせならもっと面白そうなゲームを持ってきてくださいよ」

アリスが文句を述べる。仕方がないので知恵の輪を投げてやった。

「……………馬鹿にしています？」

アリスが両手で金属で出来ているはずの知恵の輪を引きちぎった。おいおい、薄々感じてはいたがお前馬鹿力ありすぎだろ。

「乙女にそんなこと言わないでください！」

さも恥ずかしそうに可愛い子ぶっているが、どう考えても手遅れだぞ。

それにしても今日は集まりが悪い。

現にこの場に居るのはオレとアリスのみだ。全く、役立たず共が。

「リーダーは族の集会で、希先輩はその付き添い。乃之亜ちゃんはわかんないけど、会長さんと副会長さんは定期学園会議ですよ」

「うん、意外と皆忙しいね」

オレは一抹の寂しさを感じた。

「ところで、その、黒三沢？……さんは、どういう人なんですか？」
ほう、アリスが興味心身で聞いてくるな。

まあ同級生の乃之亜ちゃんが好きな相手なのだから、どんな人間かは知っておきたいのだろう。

オレは嘘をつくことにした。

「実はそいつは究極のロリコンで5歳以上9歳未満の少女にしか興味を」

「洋季、適当ほざかないでね？」

アリスが今だ持っていた知恵の輪の残骸を握る。そして鉄の塊に変えた。

「オーケー、一言で言うなら佳孝は一匹狼だ」

オレは動揺を隠そうと麻雀牌を卓上で混ぜる。あ、これよく見たらドンジャラだ。

「一匹狼？……暗い性格の人？それとも激しい？」

アリスが今だしつこく聞いてくる。せめておねだりのポーズで上目遣いくらいしてほしいものだ。あ、背が高すぎて無理か。

オレはアリスからスクリーパンチを顔面に食らった。

「暗い性格だな。人ともあんまり喋らん。ただ頭はいい。礼儀も一応わきまえてはいるが、若干生意気だな。まあそれがあいつらしいって所なんだがな」

「ふん」

アリスがオレの顔面には目もくれず頷いた。ていうか鼻が痛い。

「仲良いんですね」

「まあな、腐れ縁って奴だ」

「じゃあ、その人の好きなタイプってのもわかるんですか？」

おお！それは盲点だった。それを参考にするのは確かに有意義だな。

「アリスもたまには役に立つじゃねえか！」

「洋季はいつ役に立つのかな？」

くっ、可愛い笑顔でやなこと言ってくれるじゃないか。

「そ！そんな言葉では騙されませんからね！」

なにやらムキになって怒っているようだが、それよりも佳孝のタイプを知るために、オレはあいつの元へ向かった。

が、下校時刻も過ぎて部活動時間なので、帰宅部のあいつが居ないことに気づいたオレは仕方なく生徒会室へ戻ってきたのだった。

「気づくの遅すぎでしょ」

アリスが呆れた顔を向ける。全く、一生懸命働こうとした人間にそ

の仕打ちか？

オレは将棋版を取り出して一人で将棋を始めた。

「将棋あつたんだ…… チェスならルールがわかるのにな」

「そう言うと思って駒はチェスにしといた」

将棋版の上にチェスの駒。意外としつくり来る。

「きませんよ。洋季はどうしてそう変なことばかりするの？」

非常識だから……さ。

「意味わかんないよ」

アリスがため息をつきながら、学校から出された課題を解いていた。ふむ、ここは一つ先輩であるオレが勉強を見てやるとするかな。

オレは数学の教科書を片手にアリスの手元を覗き込んでみた。

「残念でした、英語だよ」

アリスがしてやったりな笑みを浮かべる。正直、普通に腹が立った。だがこんなこと如きで怒っていてはクールじゃない。そう、男はクールであるべきだ。

オレは数学の教科書を真つ二つに引き裂きながら笑顔でいた。

「怖いよ！そこまで怒らなくていいでしょ！？」

アリスが怯えた顔を見せるので冗談はここまでにしておこう。

「英語か……で、分からないところある？」

「幼少期はイギリスに居たから分からないわけないでしょ？」

アリスが淡々と言った。正直寂しくなった。

「ていうかイギリス出身なのか？」

「うん。お母さんが英国人でお父さんが日本人。だからハーフなのよ」

そうか、彼女にはボルオニユアルツサ人の血が半分流れているのか。「ボルオツ！？なに？？そんなわけの分からない未開の人種の血は流れてないわよ！」

なかなかいいツツコミだ。だが伊達政宗ほどではないな。

「ああ、また希先輩にそんなこと言つてえ。そういうのって周りには楽しくても本人には辛いときもあるんですからね」

ふむ。まあ本人は確かに困っていたようだし。

「……………柳生^{やぎゅうじゆうへえ}十兵衛じゃあ眼帯の位置が違うしなあ」

「洋季、いっぺん地獄が見たいの？」

「ウォー！アリスさんの血が頭に上つちまったようだ！へへ！こいつあオワタww

オレはアリスのパンチを10発くらってから考えるのを止めた。

もう一度起きると、既に最終下校時刻目前だった。

おいおい、オレはどれだけの間意識を失っていたんだ？

「さ、三十分だけだよ！」

すぐ隣に、ソファアに座っていたアリスが言い訳がましくそんなことを言った。ていうか三十分も気を失ってたとか。

「いいから！帰りますよ！」

アリスがせかせかと生徒会室を出て行く。オレも帰るしかないので起き上がるか。

一応ソファアに横になっていたオレは上体を起こすと、額に何かに乗っていたことに気づく。

湿っていたそれを手にとって見ると、桜の花びらの柄をしたハンカチだった。

「……………ほ？」

オレは分かったような表情をしながら立ち上がった。

そして、部屋を出る。すると、ドアの先にアリスが立っていた。

「……………あの、ハンカチ」

目線はずらしながら、顔を少し赤くしてアリスはそうポツリと言った。

「うーん？どんなハンカチ？」

「ちょ！意地悪しないでくださいよ！」

必死になっているアリスを見て、オレは少し笑ってから……………、

ダッシュした。

「えええええー！ー！？」

アリスの叫ぶ声が聞こえる。だが、オレには関係ない。

「なんで！？返してくださいよ！ていうかせつかくの雰囲気か！」

「はっはっは！人から貰ったものは貰いっぱなし！これはオレの極意！」

「ばかあああ！バカバカバカバカバカバカバカバカバカあああああ！！！」

廊下を全力疾走する。これはもうお遊びではない！戦いだ！

アリスも猛然と追いかけてくる。ていうか明らかにオレより速い。

やばいな、このままでは捕まってしまう。だが安心しな。地の利を使えばこっちのものだ。

オレがここで何年間生徒をやっていると思っっているんだ？

「私だってこの生徒だから分かりますよ！」

あ、それもそうか。

まあいい。基本追いかけてこは追う方より追われる方のほうが真剣に走れるのだから、このまま下駄箱まで一直線だぜ！

と、思っていたオレの目の前に人影が。そして仕方なく急停止するオレ。

「え？ちょ！急に止まらないうくださいよ！」

アリスがオレの背中にタックルしてきた。ヤバイ、背骨いつたかもだが問題はこの次だ。アリスが乗っかってきた。オレは反射的に顔をアリスに向ける。

だが体のバランスは崩れたためオレはしりもちをつく。

そしてアリスはオレの方に倒れこむ。もとい抱きついてきた。

「ひゃ！ち！違います！違うよ！抱きついてません！」

腕をしっかりとオレの体に巻きつけて体を合わせているくせに言い訳か？

「なんで洋季はそこまで平然としているのよ！」

アリスが恥ずかしさのあまりか真っ赤になって、しかも涙目だ。

うむ。さすがにおちよりすぎたか。サーセン。

だが何で今だ抱きついたまんまなんだ？

「あう！それは……こ、こけた瞬間に、力が抜けちゃって」

「おいおい、怪我してるんじゃないだろうな？」

オレがアリスの腕に手をやると、アリスが更に赤くなった。

「う、う……で、できればもう少しこのまま」

「ほう？私の目の前でいちゃつくとは……洋季、私という存在を忘れてしまったのか？」

うえー！い！東雲せんっせい！

オレはアリスの腕を巧みにすり抜けて東雲っちの前で土下座した。

「そんな事ありません！ただアリスとオレは生き別れたキツネとヒヨウの兄弟みたいなものでして」

「おい、キツネとヒヨウが兄弟って意味が分からんぞ？」

東雲先生がオレの言葉に惑わされている間に、オレはアリスに逃げるようにハンドサインを出した。

グッドラックのグーサインを必死にアリスに向ける。

「いや、洋季…親指立てただけじゃあ逃げろってハンドサインに見えないよ」

アリスが今だ顔をほんのり赤くしているが、多少冷静になったようだ。

「すみません先生。すぐに帰りますので見逃してください」

「ほう？……洋季もモテナイと思っていたが、そうでもないんじゃないか？」

うん？どしたのどしたの？

何だかにやけ顔の東雲先生が気味悪いぜ。

「シバかれなくなきゃ黙ってな」

はい。

ようやく校門まで来れたぜ。

アリスも外に出てから一息ついた。

「全くもう！先生に変なところ見られちゃったじゃん！」
変なところ？追いかけて何か？

「……………バーカ」

アリスがじと目でこっちを睨んでから、一人で歩き出す。

「じゃあ洋季。また、明日」

アリスが手をひらひらと振ってから、とぼとぼと去っていく。
うゝん……………正直寂しいな。オレ自身も、んで、あいつの後姿も。

「アゝリス、一緒に帰ろうぜ」

オレは声を上げて、アリスの後姿にぶつけた。
ふと、止まるアリス。そして、固まっていた。

おいおい、もしかして今更嫌ですとか言われそうだな。

「……………やく」

んゝ？あんだって？

「はやく来てくださいよ！一緒に帰って……………くれるんでしょ？」

「……………そうだな」

オレは駆け足でアリスに追いつく。

周りはずっかり暗くなっている。冬季は太陽が早くに落ちちまうのが嫌だな。

でもま、街灯が付いたし、家々の明かりがしっかり見える。

「で？家ってどこなんだ？」

「ミスガメ通りのマンションですよ」

「もしや富宝マンション？」

「うん」

へえ、近いじゃん。オレの住んでいるところと。

ざっと40キロぐらいしか離れてないな。

「遠いです、明らかに」

アリスがさも残念そうな表情でツッコんだ。

P 4 「廊下は走っちゃいけません」(後書き)

男の登場人物が圧倒的に少ない!?

P 5 「恋に歳の差は関係ありません」 (前書き)

いいまあ、春がきて、きみは、きれいに？

P 5 「恋に歳の差は関係ありません」

人には好きになる異性にそれなりな傾向がある。

いわゆる『好きなタイプは？』というあれだ。

「で？何が言いたいのか？」

佳孝はオレに怪訝な目線を向けながらそう問いかける。

朝の登校時刻、しかも早い時間のため、今この廊下にはオレと佳孝と乃之芽の三人だけだった。

「ていうか洋季。君はいつから不良の手下になったんだい？」

「ん？いや、手下ってわけじゃねえんだよ」

乃之芽はどうしても佳孝を見たいと駄々をこねたので連れて来たに過ぎない。

「おい、余計なことと思うな」

乃之芽がオレの首を曲げて佳孝の方を向かせないようにした。なるほど、これなら読心術は使えんな。

「ところで黒三沢くん。単刀直入に聞くが、君は今付き合っている人はいるか？」

「いいえ」

まあそれは分かっていたことだ。佳孝は平然と答えるし、乃之芽も一応安堵の色を見せる。

「じゃあ、好きな子とか、片思いの相手もいないんだな？」

「……………な、何でそんなこと言わなきゃいけないんですか」

「……………え」？「」

アウトオー……！！完璧アウト！何その反応！？

若干照れくさそうに目線逸らしたし！なんか頬赤いし！片思いし中オーラ出まくりんぐ！？

しかし！それ以前にやばいのは！

この『乃之亜ちゃんの、ドキッ！気になるあの人が気になっちゃう！え？……もしかしてこれは……初恋なの？ってなわけで皆お手伝いしちゃうよん大作戦！！』がああああああ！！

「変な作戦名をつけるな！動揺するな！」

乃之芽自身、強がる様子を見せるが、その目には苦悶の色が見える。とりあえず、オレは次の質問をした。

「さあ、意中の相手をお教え願おうか。だんまりはいかんぞ？痛い目に合いたくなければな」

「誰が言うかボケッ！」

佳孝がそう吐き捨てて去ろうとした。

「待ってくれ！」

おお！乃之芽の姉貴が前に出る！よっしゃ！ここは一つ姉貴に頼みましょう！

「……誰が好きなのは、言わなくていい。まあいい辛いだろうしな。だが、せめてお前が好きタイプとやらを教えてくださいませんか？……お前のことが好きという奴がいるんだ！そいつのために……頼む！そいつに、お前と相思相愛になれるように！チャンスくれ！この通りだ」

乃之芽が頭を下げる。こいつは驚いたぜ。

不良のトップをしておきながら、妹のためなら、その地位も、プライドも、全て殴り捨てて頭が下げれるのか？

オレは言い知れぬ感動と、乃之芽の熱い思いに同調して、頭を下げた。

だが、佳孝とは向かい合っていないので違う方向に頭を下げていた。だが！誠意なら伝わるはずだ！

「洋季。意味わかんない」

「この馬鹿は無視してくれ！本当マジで！存在を認めないでくれ！」乃之芽の熱い台詞が聞こえる。オレは柄にもなく涙を流した。

「……ちなみに聞くけど……僕のことを好きって言うてくれてい

る人って……生徒なの？」

「あ、ああ。一年生だ」

「ごめん。眼中に無い」

なにいいいい！？お前本当にロリコン

佳孝からどぎついキツクをくらう。お陰で顔面から廊下と正面衝突しちまったぜ。

「ガキに興味は無い。ただそれだけだ」

「つ、つまり私のようなお姉さんがタイプなのか？だ！ダメだ！私に惚れては！」

「惚れませんよ。あんたとは一つしか変わらんだろうが」

おいおい、お前まさか先生の中に狙っている人がいるとか言わないだろうな？

「うつ！………そ、それがなんだよ！」

「………へ？」

オレと乃之芽が本日二度目の同時リアクションを起こす。

「な！なんだよ！いいじゃんか！誰を好きになろうがさ！」

「いや、佳孝。お前は勘違いしている。どう考えても同級生………

いや、少なくとも年下、だが中学生からはお話にならん。そう高校生、女子高生！！この時期が一番、女の子は可憐で！美しくて！純情で！輝いているんだよ！ほら！東雲先生を見てみる！見た目もイイのに！胸もあるのに！性格があれだが！それでも一切男つ気がないだろ！それはあの人がもう26だからだ！女子高生じゃないんだ！三十路まで後4年切っているんだ！お前は今17だろ？単純計算でな！お前が小学生だと！あの人は今もう大学生でことなんだよ！九つも離れているんだぞ！？歳の差カップルびっくりだろ！」

後半何を言っているのかオレでもわからなかったが、とにかく魂の叫びを上げた。

何だか乃之芽から軽蔑の眼差しを感じるが、そんなことより我が親友が誤った道へ行くのを止めるほうが優先だ！

だが、どうやら佳孝に考えを変える様子は無いようだ。いや！それどころか！奴に目に火が付いた。

「東雲先生の……東雲先生のどこがダメだつて言うんだ？あの人ほど美しい人を僕は知らない。不良生徒や洋季みたいな問題児と真正面から立ち向かって、それでいて面倒見がいい。根気よく生徒に付き合つてあげるちよつとお節介な先生だよ。でもね…何だかんだでやっぱり女性なんだよ。時には疲れて甘えなくなる時もあるんだよ、あの時だつて……ゲフンゲフン。とにかく！東雲先生を悪く言う気なら、さすがの僕も切れるよ？先生だつて十分可愛い。いや、そこら辺のガキより断然可愛いね！それに大人でいつもしっかりしてるけど、時たま弱みを見せちゃう。そこにグツと来るのがいいんだよ？そんな事も分らないで未発達な子供を色目で見えるなんて、それはもはや性欲の塊だよ。本当の恋じゃないね」

な、なんと！キサマア！！

「き、君は東雲せんs……」

「てめえええええええ！！女子高生がタイプの人間を敵に回しやがつたなああああ！！！」

乃之芽がなにやら言いかけたが、んなこたあどうでもいい！

「青春時代といえは幼馴染との恋！つまり後輩！もしくは同級生！そして先輩！この三つのどれかから一生の伴侶を見つめるのが正義ジャスティス」

「！！それを言うに事欠いて性欲の塊だと！？貴様はいい年したおっさんが女子高生好き、イコール同級生好きと一緒にするつもりかあああ！！断じて違う！幼馴染とはなあ！同級生とはなああ！共に同じ記憶メモを積かなねてきた世界に二人とない子のことなんだよおおお！貴様こそ歳が離れた相手を好きになりやがつてええええ！！お前らには！記憶も！過スごしてきた日々も！明確な関係もありやしねえだろうがあああ！！！」

「年上なら誰でもいいわけじゃねえよ！東雲先生だからこそ！僕は本気になれるんだよ！！」

「東雲ティーチャーだあ？いいだろう！てめえの本気を見せてみる！お前の思いが！気持ちが！恋焦がれる真剣な恋心が！あの東雲先生に伝わるのか！そして恋が成就するのか！！見せてみやがれえええええ！！！」

オレと佳孝の叫びあう会話は朝の校内で響き渡った。

朝のホームルームの時間です。でもオレの教室にはあの伊達政宗がいます。

「伊達政宗じゃねえ。希だっつてんだろ」

木刀を片手に本日も機嫌が悪そうです。正直眼帯が『鬼』という漢字の刺繍です。

「先生。悪いがこいつをしょっ引いてもいいか？」

「どうぞどうぞ」

ちよ、真田ティーチャー！そんなにあっさり見捨てないでくれよ！

「さっさと行け疫病神！」

ひでえ！それが生徒に対する言動か！？

オレは今度真田の授業を絶対に潰してやろうと心に誓った。

そして、オレと伊達政宗は生徒会室に行く。

中へ入ると、乃之亜ちゃんが小刻みに震えながら静かに泣いていた。

「も、もしや朝の佳孝との密会を見ていたのか？」

「どこが密会だよ。叫び合ってた所為で全員知ってるだろうが」

政宗は相変わらず機嫌が悪い様子を見せる。

そして、乃之芽とアリスも、難しい顔を見せていた。

「乃之亜がこの様子だからな……。こっちとしても無視して授業に出るわけにも行かないと思って」

乃之芽がそんな事を口走る。だが、オレはそれをいいとは思わなん

なあ？

オレは全員が突っ立っている中、ソファ―にどっかりと座る。乃之亜ちゃんは一人で座る用のソファ―イスを陣取っていたので、オレは複数の人が座れるソファ―を使った。そして横になる。

「おい。さすがにふざけている場合じゃないだろ？」

乃之芽が本気で怒った目を向ける。若干涙ぐんでいるところを見ると、本気で妹の乃之亜を心配しているようだ。だが、オレはそれが行き過ぎていると思う。

「い、行き過ぎててなんだよ！」

とうとう乃之芽は怒りを爆発させて、近くの壁に拳を突き刺した。

「そのまんまだ。妹が泣いているところまでどこかと立ち入って、他人まで呼んで、それで何がしたい？」

「てめえ！そもそもお前が叫ばなきゃ乃之亜もこの事実気づかないで！」

「おいおい。じゃあなんだ？オレが叫んでいなければこの事実を黙っているつもりだったのか？意中の相手に好きな人がいる………残念だがこれは事実だぞ？それを知らせないで、乃之亜ちゃんに何をやらせるつもりだった？佳孝の気持ちを踏みにじってでも、二人をくっ付けるつもりだったのか？」

「そ、それは」

乃之芽の勢いが消える。そして、乃之亜ちゃんの泣き声も止まった。

「はつきり言わせて貰うが………好きな相手だって人間だぞ？他に好きな人がいてもおかしくねえだろ？それなのにまるで振られたとしても言いたげな雰囲気であゝ。オレ達もまだ片思いの途中なのは確かだが、それは相手もそうだろうが。だったら、まだ決着は付きゃいいねえよ。それとも何か？諦めんのか？」

オレが自分でも珍しいと思うぐらい真剣に喋った。こりゃあ朝の密会と同じくらいカッコいいぜ。

「……あ、ありがとう………ごじます………洋季さん」

乃之亜ちゃんが、ゆっくりと顔を上げてそう言った。

真っ赤な目に、乱れた髪の毛、顔はところどころ真っ赤で、泣きじやくった顔がまだそこにはあった。

「まだ……私……諦めたくないです!」

「……………ん。いい返事だ」

オレは親指を立ててグッドサインを出した。

さて、それでももう少し落ち着きたいだろうし。ここは乃之亜ちゃんをそつとしとして、オレ達は退散するとしますか。

「行こうぜ」

オレは三人にそう言って、部屋を出た。

アリスが最初に出て、政宗が続き、乃之芽も出て最後がオレだ。

オレがそつとドアを閉めると、アリスと政宗は笑顔をオレに向けた。

「やるときはやりますねえ」。さすが洋季」

「まあ、これで朝の失態は帳消しにしてやろう」

二人がそんな事を口にしながら、授業が始まるのでさっさと教室へ向かっていった。

まあ、ようやくあいつらもオレの偉大さに気づいたってことさ。

オレは最高のキメ顔を窓の外へ向けてした。

「おい。私がまだいるぞ」

オウ、姉御じゃないですか!

いやね、先ほどの台詞はちよいと偉そうでしたがね、まあ必要だったため言ったのですから、その。

「なにとぞご容赦を」

オレはヨガのポーズをとろうとした、でも体が硬くて出来なかった。

「別に怒らねえよ。ただ、ちょっと屋上に来てくれ」

ヤバイ。死亡フラグだった。みなさんなようなら。

重い鉄のドアを開けて、久しぶりに来ました屋上です。

フェンスに囲まれつつも結構な広さがあるこのスペースには、以前ソファーと机などがあったが、全部生徒会室へ移した。お陰で生徒会室にはソファーがたくさんある。

それで？ここへきてオレをどうするつもりですか姉御？

「なあ……………洋季。私は……………姉失格か？」

「……………はい？」

意外な質問が飛ばされた。だが、声とその様子からして分かる。乃之芽は真剣に問いかけていることに。

まあ大方、オレがちと強く言い過ぎたのが原因かな？

「なあ……………どうなんだ？」

乃之芽はオレのほうを一切見ない。どうやら読心術を使う気もないようだ。

まあ、そんな事をする余裕も無いぐらい、傷ついているようだがな。つくづくアンタはすごい妹思いのお姉さんだよ。

ここまで美しい姉妹愛なんぞ、オレア見たこと無いね。

「……………あんたは最高の姉さんだと思うぜ」

「お世辞はいい。本当の事を言ってくれ！……………私は、私は……………自分勝手に、妹のためだと思って、それで、浅はかに行動して……………乃之亜の、乃之亜の気持ち……………を、わかってやれなかったんじゃない？」

涙声だ。だが、押し殺している。

女の子なんだから、泣きたいだけ泣けばいいのにな。

乃之亜ちゃんみたいに泣けないのかねえ？不良のヘッドだからか？プライドがあるからか？

「あんたはさ…ヘッドでありながら、妹のためにプライドも捨てて、頭下げてたじゃん。あれがなきや佳孝の片思いの相手も分からなかったし、なにより、妹を一番に考えている姉が、姉失格なわけねえだろ？オレがはつきり言っただけだよ。あんたは良いお姉さんだ」

「……………そうか」

そう言いつつも、まだ乃之芽の肩は震えていた。

まあ、スツキリできるまで、お供ぐらいしてやるよ。

オレは誰もこれないようにドアに寄りかかった。

ああ、空がうざったいくらい青くて晴れてやがるぜ。

まあ、そんな空が、この姉妹を元氣付けてやればいいんだがな？

P5「恋に歳の差は関係ありません」(後書き)

センサー！男子が！トイレから帰ってきません！

なにー！知るか！

P 6 「人には聞いてはいけない秘密があります」 (前書き)

バレンタインデー ♪ キック (キッス)

P 6 「人には聞いてはいけない秘密があります」

今年のバレンタインデーは不覚にも日曜。

まあ、どうせ毎年貰ってないのでもうどうでもいい気がしてきました。

そんなオレは、日曜という休日を自分の家の屋根の上で過ごしています。

自室から、巧みに登って屋根の上。

ふむ、見渡す限りの街の情景、美しいなり。

オレは母上と妹者からありがたく頂いたチョコを食べる。

板チョコ二枚だ。さすがに手抜き過ぎやしないか？

まあいい。オレはチョコレート大好きなんだ。下手に手作りでするものを食べさせられるよりはいいものさ。ふふ、これぞ負け犬の遠吠え。

そんな感傷に浸^{ひた}っていると、ズボンポケットから音がする。

ほう？電話だ。携帯を開いたオレは通話相手確かめる。

リア充キングこと龍介だ。何か用か？

オレは嫌々ながら通話ボタンを押す。

『よ！洋季！助けてくれ！』

悲痛な叫びと、恐らく走っているからだろう、息遣いも聞こえる。

「どうしたんだ！大丈夫か！おい！？」

オレは一応表面上は驚いてやる。まあ、どうして追いかけているのかぐらい想像できるんだがな。

『い、今オモカゲ町、西サビシ広場にいるんだが……他校の女子までオレを追いかけているんだ！オレが甘いもの食べれないこと知らないからしつこくチョコを渡そうと』

「あ、すまん。トンネルだから電波が」

オレはすぐさま通話を切った。

そして龍介の居場所をすぐさま龍介ファンクラブのケータイホームページにアップする。

ふふふ、あえて言おう。ザマー三口。

さて、龍介からの電話はその後來ない。まあ女子に群がれて襲われてでもいるのだろう。

さすがにそこまでは、モテたくないものだな。そんな事を言っていると、また、携帯が鳴る。

はてさて？ 龍介が逃げ切って苦情の電話でもしてきたのか？

画面に目をやると、伊達政宗の文字が見えた。

おいおい、今度は政宗かよ。オレは渋々通話ボタンを押す。

『よ、洋季。今暇か？』

「日曜はグータラ過ごすために存在するんだ。暇でいることが仕事なんだぜ？」

『よし、暇なんだな。ちょっと付き合え』

うきうきした声で話す政宗。はて？ 追いかけてられているわけではないのか？

まあ、龍介とは違い、ちょっと近寄りがたいイメージがあるからな。女子も声がかけにくいのだろう。

「いいだろう。お前の暇に付き合ってやるよ」

『じゃ、じゃあ。西サビシ広場集合な。30分だけ待ってやる』
え？ なに？ もうお前は広場にいるの？

その真偽を聞きたかったが、携帯はもう切られた。仕方がない、ここは大人しく行ってやるとするか。

まあオレの家からは自転車を使って15分でいける距離だ。さっさとして行つてやろう。

マフラーと革のジャンパーを身に付け、颯爽とオレは家を出る。すると、またもや携帯が。おいおい？ 今度はまさか佳孝か会長のどちらか？

いや、違った。アリスだ。ほお？意外だな。こんな日に何のようだろうか？

「もしもし？」

『洋季？あのさ、その……………きよ、今日一緒に遊ばない？』

「ああ、いいよ」

アリスからの誘いをあつさり受けるオレ。ふふ、好感度アップだな。

「じゃあ……………西サビシ広場集合でいいか？」

『う、うん！』

これで政宗との約束を守りつつ、アリスと遊べるという最強の計画。ふふふ、我ながら素晴らしすぎる手際の良さだ。

オレは自慢の愛車、『スター・ギャラクシー』妹者命名のママチャリに乗った。

さあて、やって来ました西サビシ広場。

ジョギングコースが設置され、きれいな広場として結構有名だ。

木々が植えられているので、季節が暖かくなれば、デートスポットとしても栄える。

さて、早速着いたオレはまず政宗を探す。

アリスは一時間ほどで来るそうだ。おかしいな、距離的には自転車で20分ほどで着くはずだが？

まあいい。乙女はあえてゆっくり来るものさ。

つと、広場に入って100メートルほど進むと、この広場のシンボルである大きな噴水が見えた。その噴水に見とれている人が一人。政宗だ。

「よお、待ったか？」

オレは自転車で近づきながら声をかける。政宗も気づき振り返った。

「お、おお。いや、そんなに待つじゃない」

眼帯は相変わらずつけているが、本日はジーンパンと白い毛皮のコートというファッションの政宗。

うぐっ、男相手への評価としては、言いにくいが、まあ、かわいい

感じた。

「か、可愛いとか言うにゃ！……言うな」

すんごく狙ってる感のあるいい間違いだが、まあ見逃そう。

「い、いいから！それよりも、買い物に付き合っただけで欲しくてだな」

「おう、わかった。あ、だがちょっと待ってくれ。もうすぐアリスも来るんだよ」

「……………なに？」

政宗が予期せぬ驚いた表情をする。ま、まあ、大勢のほうを楽しめるだろ？

「……………は、はは。ま、まあそうだな」

若干元気がなくなったようだが？　もしや男同士でしか買えない買い物？

「違うわ！大丈夫だから気にすんな！バツカ！」

オレは怒られた。

程なくしてアリスも登場。そしてアリスも驚嘆。

「の、希先輩との約束があつたんですね……………」

アリスが今度は申し訳なさそうな様子を見せる。安心しろ、男同士でしか買えないものを買うわけじゃない！

「いいから、コイツが馬鹿なのは今に始まったことじゃない」

政宗は相変わらずドライです。

アリスもどこことなく冷たいまま、オレ達はショッピングセンター『カオス』へ向かいます。

女子同士だと、洋服コーナーでの会話はよく弾むようです。

それはよく知っているのだが、男女でもいけるようです。

政宗とアリスは結構楽しそうに服を見てます。

春モデルがどうか言ってますが、オレは会話についていきませんが、ただし洋服持ちはさせられます。キープがたくさんあって両腕いっぱいにあります。

「これもいいなあ。あ、これかわいい！」

「これも似合うぞ。色が私好みだ」

「「洋季はどう思う？」」

二人いっぺんに聞いてくるとは、よし、ここはかつこよく返すのがセオリーだな。

「ふむ……アリスのその黄色い花柄の上着は確かに似合うな。それにあえて白黒のチェックスカート、そして中のシャツを落着いた春色で決めるといいだろう。幸いその上着の黄色はそこまで目に付くような派手な黄色じゃない。目立たない自然体に白黒のチェックで印象を持たす。しかも重ね着だからおしゃれにいける。政宗の青系統の長袖は確かに政宗自身にもよく合う。下はあえてデニムの水色で決めちゃうのもいいな。同系色で淡白なファッションにも見えるが、そこがまたいい。帽子やカバンなどの小物がうまくその服装に馴染めば完璧ってやつだな」

ふふ、どうだこの素晴らしき助言。リア充キングと親友を長くしているためか、服装にならそこそこ答えれるんだぜ。

「い、意外だな。そこまで考えてくれるとは……ただデニムはちよつと女の子っぽいような。あと今度政宗って言ったら死刑な」

「まさ……伊達は案外女物でもいける。男だからって気にすることはないさ」

「え？洋季って希先輩の事情をしっ」

「アリス、いいから」

政宗がアリスの口を押さえる。おや？何かオレまずいことした？

「いいからいいから……そ、それより！この服は？」

政宗がなにやらオレに隠しているようだな？ふふふ、このオレに隠し事は通用しないぞ？

オレが得意に笑っていると、背中に殺気を感じた。

「政宗じゃない……って言ってるよね？」

すまん。忘れてた。

オレは頭から血の噴水を上げた。

服装を見終わり、昼食をとった後、オレ達はまたあの広場に戻った。時間も帰る時刻としてはいい具合だな。そう思っていると、アリスが持っていたバッグから包みを出した。

「じゃあ、一応チョコレート！……きよ、今日はありがとうございまして」

も、もしかや手作りチョコか？

「ま、まあね……」

オレは人生初の手作りチョコに涙を流す。ありがとう！みんな！オレ生きてて良かったよ！

「で、できればお礼は口で言うてくださいよ」

「そうだな。ありがとう！」

オレが笑顔でそう言うのと、アリスは満足そうに笑った。

「じゃあ、私はこれで」

アリスはそのまま帰ってしまう。まあ、暗くならないうちに帰るべきだから仕方がないか。

広場にはオレと政宗のみ。そして、政宗は噴水に、また見とれていった。

「好きか？噴水？」

「ん？……まあ、な」

水が宙に噴き上げられ、そして水面の張った水溜りにもどっていく。まあ、面白い光景なのは違いないな。モノの推移を見るのは確かに面白い。

冷たい風が吹いたが、そこまで寒いとは感じなかった。そろそろ春か？

「なあ、洋季……黙ってこれを受け取ってくれないか？」

政宗が、これまた可愛くラッピングされた包みをオレに渡した。

「……これは、お前からのか？」

「そつだ。私からお前への、だ」

「ふむ………実は私は女だったんだって展開か？」

「いいや。私は男だ」

んなさっぱり言い切られると困るんだが？

だが、政宗はさも、オレが困っているのを逆に楽しんでいるように見える。

「ふふふ、なあ………お前は、私がどちらに見える？」

「………第一印象だけなら男かなって思ってたが、今ではどっちでもいいな」

オレは正直にものを言う。だが、政宗はそれに怒る様子も見せない。オレは言葉を続けた。

「お前はお前だ。政宗って呼べば、私は希だと返す。そんな、堅い性格の割には、付き合いのいい伊達希つてのが、オレは嫌いじゃない。別に、今更男だとか女だとか言われても、嫌いにはならん」

「そうか………」

おいおい、まるでオレがそう言うのを知っていたみたいに落ち着いているな？

「で？結局どっちなんだ？」

「ん？知りたいのなら私の体を触っていいぞ？」

「ブツ！」

オレは恐らく人生で初めて冗談返しをされた。

常に優位なはずのオレが、顔を赤くさせていやがる。

「ははっ、なんだ？案外純情だなお前？」

くっ、いい笑顔でそんな事を言われるオレ。かつこ悪いなオイ。

「じゃあ、ホワイトデー、楽しみにしてるぞ？」

「はいはい」

政宗は楽しそうに去っていった。全く、何がしたかったんだか？

まあ、あいつにもあいつの事情があるんだろ。

オレは二つの包みをポケットに入れて、自転車に乗る。

「さて……………帰るか」

もう夕暮れ時、早く帰らねえとな。

「まあ待てよ」

「ん？」

……………ああ、これはこれはリア充キングさん。

ボロボロになった様子で、近くの茂みにでも隠れていたんですか？

「そうだよ？何とか逃げ切れたけどね？誰かなあ……………オレの居場所をバラした人？」

「う……………ん。し・ら・ね」

オレは猛スピードでペダルをこぐ。そして走って追いかけてくる龍介。

このまま家に帰るわけにもいかないのです、オレらは一晩中追いかけてここをした。

ああ、星空がまばゆい……………。

P 6 「人には聞いてはいけない秘密があります」 (後書き)

男女男男女女 男女男女男男女女

さあて、政宗ってどっちなんですかね？

P7「安請け合いは止めましょう」（前書き）

テスト開けです。ハイ・・・。

P7「安請け合いは止めましょう」

おなじみ生徒会室でトランプをしているオレ。

この前は姉御がワンワン泣いていたので慰めていました。

「洋季。悪いことは言わん。死ね」

会長こと、勝浦春がなにやら物騒なことを申しました。そしてトランプのハートの9を出す。

テーブルの中央には既にカードが表にして重ねられている。

そして、副会長こと、皐月美恵が今度はスペードのジャックを出す。

「イレブンバックです。さあ、次は洋季様ですよ」

イレブンバック。この単語を聞いてピンと来た人はかなりの大富豪プレイヤーだ。

ローカルルールと呼ばれる、その地域によって決められた詳細ルールの中でも意外と知られていないこのルール。要するに11、つまりジャックが出た時点で、小規模な革命が起きるのだ。

革命のルールは立場逆転。2が一番強く、3が最弱だったのが、今度は2が最弱で3が最強となる。

そのまんまの意味で数値の優劣が逆転することだ。

ただし、ジョーカーは相変わらず切り札として存在しており、また、その効力は場のカードが切られるまでだ。

そしてオレのターン。

オレは手札より、ダイヤの8を召喚する。

「なに？8ぎり、だと？」

8ぎり、またの名を八流し。その名の通り、強制的に場のカードを切る効力を持っている。

「やりますね。さあ、洋季様からですよ」

副会長は余裕の笑みを浮かべる。手札は残り4枚。その様子だと、恐らく強いカードを持っているだろうな。

「ちくしょう！折角のイレブンバックが！」

代わって、会長は怒気のこもった声を出す。

バカめ、貴様のその様子からして、会長の手札は最弱カードが多いと思われる。

その手札7枚の多さからしても、楽勝で潰せそうだ。

問題はオレの手札。5枚という決して少ないとは言えないこの手札、さあ、どう切り出す？

最弱カードは4。これはマジで役に立たない。

後は10、13、エース、そして手札内での最強カード2。

一見有利に見える手札だが、楽観視は出来ない。

副会長の手札がそこそこの強さだと仮定して、尚且つ相手に主導権を握られないようにせねば。

オレは様子見のため、10を場に置く。

「洋季。言っておきたいことがある」

会長が自分の番になり、今度は13、キングを出した。

意外だ。これほど強いカードを持っていたのか！？

「お前、考えが顔に出やすいから、お前の手札もう知っちゃったぞ？」

「……………え？」

ゲームはそこで終了した。

これだからトランプは嫌いだよ！みんなオレに読心術使っちゃってさ！

ゲームはフェアにやるべきだろ？これじゃあ楽しめねえし！オレ勝てねえよ！

オレが不機嫌になりながらソファーに横たわる。

すると、会長と副会長が二人でババ抜きを始めた。

おいおい、御気楽なもんだな？オレを仲間はずれにして二人でイチヤつきやがって！

「い！イチヤついてなんかいませんよ！」

副会長が予想通りの赤い顔をしてムキに答える。

「そうそう。僕らは絶対的なパートナー！仕事の上で欠かせない関係！会長と副会長という重要なポストにいる人間なんだ。そんなイチヤつくような関係では断じてないね！」

会長がさも当然の如く言い切りました。

照れ隠しのかけらも無いようだ。むしろそれで納得している様子だ。副会長の機嫌があらさまに悪くなった。

おいおい、こっちは乃之亜ちゃんの恋路を応援中なんだぞ？

前途多難な恋は一つで十分だっつーの。

「なんだあ？もう一つ前途多難な恋があるとでも言いたいのか？」

会長が首をかしげて聞いてきやがった。

こんな男にだけはなりたくないね。ほら見ろ、副会長から負のオーラが漂ってきている。

顔は下に向けてるし。なんか黒いもやがかかってるし。

「ん？どうした副会長？」

「……………なんでもないです」

不憫すぎるだろ。とりあえずがんばれとだけ言っておこう。

最終下校時刻なので帰ります。

下駄箱で靴を代えて外へ出ると、校門に見覚えのある顔が見えました。

リア充キングです。

「おい。そのあだ名止めろって」

設楽龍介。そろそろ皆さんの記憶からなくなっていたであろう男です。

「そんな事より、ちょっと相談にのってくれよ」

真剣な顔をのぞかせる龍介。ふむ、興味があるので聞いてみよう。

まだ桜が咲くような季節ではないので、道端の植木は寂しい様子で佇^{たたず}んでいる。

そんな道を男二人で仲良く歩くとは、いささか不本意なものだ。

だがまあ、顔が良いコイツがいるお陰で、道行く乙女達から熱烈な視線を感じる。

別にオレに向けた視線ではないが、正直見られて嫌な気はしない。オレは最高に自分ではかつこいいと思っっているキメ顔をキープして歩いていた。

「洋季。そのふざけた顔は止めて、オレの話を真剣に聞いて欲しい」
龍介が目線を前に向けながら、オレに結構強くそんな台詞を言う。
おいおい、おふざけ合っただっていうのに、行き成りマジになられたら調子狂っちまうぜ。

だが、それよりも龍介の言う真剣な話たるものが、どれほどのモノか気になったオレは、静かに耳を傾ける。

「その……オレ、好きになった人がいるんだ」

うん、どうでもいい話だったな。

「え！？ちょ！なんだよどうでもいい話って！？」

「どうでも良いからどうでも良いと言ったまでだ。これはオレの感想でもあり、全世界の意思でもある」

「意味わかんねえよ！頼むから、真剣に聞いてくれ」

やれやれ、顔を赤くして恋する乙女みたいな表情の龍介をみていると、正直『乙女をなめるな』と怒ってやりたくなってくるが、ぶっちゃけ普通の女の子より顔が良いので何とも言えなくなる。

でもやっぱりどうでもいい気がする。

「あのさあ、モテない男が相談をするのは分かるんだが、てめえはリア充、しかもキング……つまりモテモテなんだよ！だから好きになった子がいればナンパでもして落としゃあいいだろうが！」

オレが心の底から思っていることをぶちまける。

とってもスッキリした。でわ帰ろう。

「オイ！話は終わってねえ！」

今だ強引にオレの首を掴む龍介。正直、オレ死にそうだ。

「こ！告白しても振られる可能性があるだろ！だ、だからだな！練習とかアプローチとかが必要なんだよ！」

むう。面倒極まりないが、ただ今絶賛首絞められ中なので、いやいや手伝うことにする。

全く、乃之亜ちゃんや副会長に佳孝まで、みんな恋をしたら周りが見えなくなるんだな？

これが恋は盲目ってやつ？うるさいわ！

さて、人のいない寂しい公園に来ました。

遊具も少なく、古びたベンチが一台だけという『え？公園なの？』

つてな風景のこの場所に、またまた男二人で一緒にいます。しかもベンチに座ってます。

「じゃ、じゃあさ……ま、まずは、告白の練習かな？」

顔を赤くさせてもじもじする龍介。なまじ顔が美形なので、正直悪寒が走る。

これ周りに人がいなくて本当に良かった。いたら100%誤解されている光景だよ。

「な、何て言ったらいいかな？」

「アナタヲ ヒトメミタトキカラ スキデシタ」

「何で片言なんだよ！」

オレのキメ台詞を否定する龍介。よかった、まだツツコミをする力はあるようだ。

だが、龍介は自分の中で告白する言葉を考えるのに夢中のように、次第にトリップしていく。

ぶつぶつ呟きながら、目線が宙に浮いている。

「ところでよお。好きな子って誰？」

オレの質問に、ようやく自分の世界から帰ってきた龍介。

「え、えつと……じ、実は年上なんだが」

え？何？君も東雲先生狙い？

「せ！先生じゃねえよ！あんな年増誰が好きになる！」

男としては頷いてやりたい台詞だが、世の女性全員を敵に回したぞ？お前。

「せ、先輩なんだけどよ……その、頭が良くて、リーダーシップがあつて。いつもクールな女性なんだよ。スタイルもいいし、遠慮なくズバツとものを言う性格なんだけど、そこがまた良くてさ。それで」

あゝはいはい。ノロケ結構けっこう。

「な、なんだよ！真剣に聞けつて！その女性はな、完璧すぎる故に種もないようなあらぬ噂をされているんだよ！不良のヘッドだとか何とか、みんなそんな事言つてあの人を避けているんだ。ひどいと思わないか！？」

「うん。みんなひどいね。いじめ、かつこ悪い」

「超棒読みじゃねえか！」

まあ、それ以前になんとなぐく、思い当たる人物がいる気がするよ
うなしないような。

いや、いないって事にしよう。うん。

「夜桜、乃之芽さん、っていうんだ」

恥ずかしそうに、でも、どこかうれしそうに、龍介は言った。

自分の好きな人を告白したのだ、結構な勇気がいただろう。

言つた後、照れ隠しに頭を掻いている仕草が、それを証明している。

さあて、聞いたし、帰るか。

「えええ！？おまつ！そんな簡単に帰んなよ！」

「なぜだ？聞いたんだし帰る。オレの仕事はここまでだ」

「いゝや！オレの恋が成就するまで付き合え！手伝つてくれ！頼む
！」

龍介が土下座する。オレは龍介の下げた頭の後頭部に右足を乗つける。

「ぐつ！……ふ、踏みただけ踏めよ」

え？こいつDM？

「違う！」

龍介がそう怒鳴る。だが、頭は決して上げなかった。

そして、己がどれほど本気であるのかを、語り始める。

「初めて先輩を見たのは！オレが別の女の子の告白を断っている時だった！」

え？自慢？

オレは踏んでいる足に更に力かける。

「ぐおっ！……お、オレは！確かに世間で言うなら、モテている人種だ！だが！……良い顔に生まれた事に感謝はしても、四六時中、好きでもない女の子から告白をされるこの生活を、いいと思ったことはない！」

「てめえええええ！そんな事をいけしゃあしやあと言いやがって！」

「じゃあ洋季！お前は名前も知らないような女の子からの告白を、全部受けてオツケーするつもりなのか？」

龍介の真面目な会話が、いつの間にか始まっている。

そして、この質問はなかなかシビアなものだと思った。

「そ、そりゃあ……全員にオツケーはしないけどよお」

「つまり、振るんだろ？」

……まあ、結果的にはそうなるな。

だが、むしろ好きでもないのに付き合ってたって仕方がない。それはつまり弄んでいるというわけだ。

「そうだ。オレは、女の子相手にそんな態度を取りたいとは思わないし、そうしたいとも思っていない。だから、今までは普通に断ってきたんだよ」

確か、龍介は平均的に1週間にラブレターは10枚。告白は4回近くある。

一年次からその記録は続いているので、相当の人数を振ってきたのは想像に難くない。

ふむ、さすがにそれだけの人数を振るつてのは、振る側も辛いもんだな。

「別に、オレはいいんだよ」

龍介から返事が来る。どうやら顔は向けていないくせに読心術を發動しているようだ。

「いいから聞けって！……オレは、そんなに強い台詞で断ったりはしない。だからなのか、なかなか諦めてくれない子がいる」

ああ、ストーリーカー？

「ま、まあ、中にはそんな子もいる」

がんばれストーリーカーちゃん。今度あったらコイツの住所教えてあげる！

「もう知られてるよ」

龍介の淡々とした言葉に、オレは底知れぬ恐怖を感じた。

「ただ、一番困るのがさ……男の不良を呼んできてオレに報復しようとする子がいるんだ。振った代償ってやつかね？」

なんかもうお前が不憫すぎる気がしてきた。

「まあ、運がいいとは言えないが……そのお陰で、先輩に会えたんだ」

今だ足を後頭部に乗つけていたが、オレはさすがに罪悪感を感じて足をどける。

だが、龍介はそのままの姿勢で台詞を続けた。

「出会いはずけないもんだったださ。不良にボコボコ二されるオレを、先輩が助けに入ってくれたんだよ。女の子に助けられるってのは、男としては情けないが……先輩のその行動と、姿に、一目惚れしたんだ。ははっ、情けないだろ？……助けられておきながら、勝手に好きになっちゃったんだ。男の風上にも置けねえだろ？……でも！好きなんだ！」

熱い台詞だな。龍介は、自分の気持ちを平然と言ったのけていやがる。

その言葉に裏もなけりゃあ、猫被ったような建前もない。

本音だ。自分の中の真実を、惜しげもなく出している。

「こんなに人を好きになったには、初めてだし……これから先も、

多分ない。だから、本気で告白したい！それで！うまくいきたい！
……お前に頼っている時点で、男としてダメなのは分かっている
……だが！やるべきことは全て自分でやる！だから！アドバイスや、
相談だけは、頼っても……いいか？」

龍介は今だ顔を上げない。

オレは、一度空に顔を向けた。

こんな簡素な公園にも、空は顔を向けてくれている。

多少夕暮れ色に化粧してはいるが、空は相変わらず見下ろしている。
さて、オレはどう行動すればいい？

こんな質問を空に投げてみる。

<え？うん、まあ、手伝ってやれよ>

ちよ、おい！適当に返すなよ！

「頼む！洋季……お前にして頼めないんだ！」

<ほらさあ、こうやって言ってるわけだし。意地悪せず手伝って

やんなよ？>

おい、空。なんかお前馴れ馴れしすぎるだろ？

あと声が結構低いぞ！？仮にも空なんだから透き通った声でいろよ！

「洋季！どうなんだ！」

「だあああ！わかった！手伝うからお前は黙ってる！」

「てな理由で、急遽、『ワオ！乃之芽の姉御にも春が！？あのイケ
メンバーイ龍介がマジ恋！こりゃあこの二人を応援せずどうするん
だい？空も全面的にバックアップしますぜ！』大作戦をここに展開
します」

乃之芽拔きのメンバーに、オレはその旨を伝えた。

「……」

痛い、痛いよみんなの視線が。

P7「安請け合いは止めましょう」（後書き）

なんだかややこしくなって参りました。

P 8 「肖像権を大切に」

久しぶりの雨が地面を潤す本日。

悪天候にも拘らず、私、伊藤洋季は元気です。

今も数学の授業の時間ですが関係ない。DSとPSPを両手に持つてゲームを展開しています。どちらもアクションRPGです。ひゃっはー！死ねい雑魚が！

「洋季……頼む、静かにしてくれ」

東雲先生が憂い^{うれ}に澄んだ瞳を窓の外に向けながら、一言そう言った。そう、たった一言だ。これだけ。

いつもなら鉄拳の百や二百は飛んでくるところなのに？

……まあ、原因が分からないわけではないがな。

オレはPSS3を取り出して起動した。もちろんテレビ持込で。そして授業とは名ばかりの自習時間を過ごしたのだった。

「洋季。東雲先生のことなんだが……」

廊下でカルタをしていたオレに話しかける先生が一人。

ほう、生物の桜田だ。今日も着ている白衣が白くて眩しい。

「おふざけ無しで聞け。東雲先生の様子がおかしいのは分かっているな？」

「もちろん。お陰で退屈な数学の授業は楽しいゲーム時間に早がりつすよww」

「安心しろ。お前にだけ特別補習を開いてやる」

オレは絶望の淵に叩き落された。

「でだ。その原因を知っているか？」

「知らないですね」

誰がゆーかww内緒だもんね」。

オレは桜田先生のどぎついエルボーをくらった後、生物室に連れ込まれて自白剤を飲まされた。正直まずいなあれ。人間の飲み物じゃない。

「で、要約すると……………黒三沢くんの告白が原因なんだな？」

桜田がようやく真相を知れてスッキリしたようで、安堵の息を吐く代わってオレは二リットル飲まされた自白剤を吐く作業に勤しんでいた。

「いやしかし……………東雲先生も案外うぶなんだ。フフ、面白いものだ」

「はは、私としては一生徒に平気で自白剤を使う教師がいることのほうが滑稽ですよ」

「自業自得だ」

え？どこが？

「そうだ。洋季、ちょっと我々でその二人の後押しをしてやろうじゃないか」

「断る。それは出来ない相談だ」

オレはきつぱりとそう断った。ふふ、なにせ佳孝には先客がいるからな。そっちの恋路を手伝わなければならぬのだよ。

「なに？黒三沢くんは意外とモテるのだな？」

「え？……………な、なぜそれを？」

オレの驚嘆に震える表情を見て、桜田先生は心底理解できないといった表情をオレに向けた。全く、言いたい事があるならばつきり言っただけだ。

「馬鹿は嫌いだ。そして手伝え」

「わお。超キツパリ言ったよコレ」

だがしかし。手伝えないというスタンスは変わらない。むしろこれは佳孝本人の問題だ。

あいつは一人の力で東雲先生を振り向かせると豪語した。そう、自分の気持ちを伝えると、このオレに約束をしたのだ。今更この契りを無効に出来ようか？ いや！ 出来ない！

「そうだろっ！？」

「うるさい。恋は前途多難でいてこそ恋なのだ。さあ、お遊びの始まりだ」

桜田先生の悪い笑みが見える。そしてオレの不幸な道も見えてきた。

職員室です。東雲先生は相変わらず思い詰めた表情をしています。

「ふふ、あれこそ恋する乙女の表情。実にそられる」

桜田先生がなにやら物騒なことを呟いています。助けてください。

「なあ洋季。教師の特権とは何か知っているか？」

「へへ、そりゃあ教師の立場を利用して、青い果実である生徒を毒牙にかける事でしょう？」

「半分正解だ」

どうしよう。この人材オレよりキャラ濃いぞ。

「恋する乙女を近くで観察すること、その少女を弄ぶこと。これこそ私が教師を志した最大の理由なのだよ」

新たな変人を発見。生物教師の桜田。レズ魔の可能性あり。

「レズだけじゃない。BLも歓迎する」

「あんたが教師になれるから今の日本はダメなんだよ」

オレはつくづく今の日本の腐敗について現首相と会談したいと切実に願った。

「それよりも。東雲先生を早速おちくろうと思う。洋季、なんかして来い」

「さすがだ先生！ 同僚の仕事仲間を遊び道具にするだけじゃ飽き足らず、生徒を奴隷同様に扱うなんて最低だぜ！」

オレは顔面にお拳を一つ頂いた。

東雲先生の机の前まで来ました。でも東雲先生は気づいていません。

「東雲っち。佳孝が呼んでるぞ」

「ガタガタッ！」

イスをひっくり返し立ち上がる東雲先生。そんなあなたに一言。

「うつそで〜す」

オレは両目に青タン、タンコブ数十個、そして齒の損失というあられもない姿で桜田先生の机まで戻ってきた。

「おいおい。君には恋する乙女を煽^{あお}るという選択しか出来ないのか？」

「え？そうして来いと言ったのはあなたでは？」

「本当に君は馬鹿だな。私達は恋の応援をするのだぞ？」

そう言えばそうだったな。まあそれ以前にオレには手伝わなければならぬ先約がいるんだけどな。

「洋季。お前はさつきから執拗^{しつよう}に先約がいるとか言うが……恋に先も後もないのだぞ？最終的に恋仲になればそれでおしまい。先に狙っていたとかそんな事を後で喚^{わめ}いても無意味なんだぞ？」

「さらつと美しい横顔でシリアスに決めてますけど、要約すれば何でもありつて事なんですな」

「そうとも言つかない」

ふむ。まあ桜田先生の言い分も分からないわけではない。だが、こちらにも生半可な覚悟でやっているわけではないからな。命を懸けるし。

「時に洋季。黒三沢君を好きだという女の子は誰か教えてくれるかい？」

「残念だが守秘義務だ。ぼやかして教えると、不良ヘッ드의妹つて所かな？」

「乃之亜ちゃんか、意外だな」

どうしよう。ばれてしまいました。

「だが、東雲先生と乃之亜ちゃんだと、やはり東雲先生を応援した

いな」

「ほお？同僚を応援ですか。それとも東雲先生の慌てる姿が面白いんですか？」

「どちらも、と言っておこう」

やっぱり変態だ。

「しかし、考えてもみてくれ。東雲先生に今後、春が来ると思うか？」

「まあ………来ないかな？」

「はつきりと言うね。だが、その可能性は高い。だとしたら、これはもしかすると人生で数回ある彼女のチャンスの一つなのでは？」

うむむ。そう考えてみると、そんな気もする。

だが、それは乃之亜ちゃんにも言えるのでは？

「ほう？どうしてそう思う？」

桜田の挑戦的な目に、オレは自信満々で言っただった。

「あんなおくてで純粋な女の子が、人を好きになることなんて滅多にないんじゃないかな？」

オレがそう言くと、桜田先生はなるほど、と言っただけだった。

「もういい。そこまでこちらの協力を拒むのなら、好きにしているさ」

「そりやどうも。じゃあ、早速、乃之亜ちゃんのために作戦でも考えますよ」

オレは手をひらひらさせて、桜田先生から離れていった。

毎度おなじみ生徒会室に来ました。

本日は政宗と乃之亜の二人のみが来ているようです。

「遅かったじゃねえか」

政宗が『寂しさのあまりどうにかなっちゃいそうだ』とオレに泣きついてきました。

「言っただけ」

政宗の木刀斬り。オレは右肩に多大な損傷を得た。

「なんかお前、私に対する見方を変えてきてないか？変ね目で見てたら殺すぞ」

「大丈夫だ。チョコ貰ったけどそれだけだ」

「ええ！？チョコって希先輩どういうことですか！？」

乃之亜ちゃんの驚きの声。政宗が真っ赤になって照れ隠しにオレを八つ裂きにする。

オレは悲鳴をあげる前に真っ白になった。

「あれ？オレいつの間に生徒会室へ？」

「気にするな！」

政宗がものすごい形相でオレを見ってくる。どうした？合戦か？

「それよりも！……乃之亜ちゃんの恋路、どうするんだ？」

政宗が本題を持ってきてくれた。ようやくこれで話が進む。

「とりあえず。お弁当大作戦で行こう」

オレは巻物を取り出して広げながらそう言った。

「古来より、異性から異性への食べ物贈る行為は、重要な信頼関係の構築にも利用されてきた。効果もばっちりな上に、近年は『女の子からお弁当を貰って、しかも一緒に食べるだ？コレは恋の予感！』という思考回路の男子も多いため、気持ちのさりげないアプローチにも最適だ。王道だがやらない手はない。どうだ？」

「すみません……料理、出来ません」

おつとおおお！！ここでまさかの乃之亜ちゃんからの一言！計画は失敗だああ！！

「いやいや、諦めるの早すぎだろ」

絶望のあまり両膝をついていたオレに、政宗は優しい言葉をかけてくれた。

「料理は慣れた。私もそこまではうまくないが教えることぐらいしてやろう」

「ありがとうございます！」

意外だな。乃之亜ちゃんが出来なくて、政宗は出来る……。実に意外だ。

「弁当はもう少し時間がかかるから、他の作戦はないのか？」

「任せる。もう一つある。これを見てくれ」

オレはもう一つ巻物を取り出して広げた。

「我が校は都合のいい事に、三学年合同の遠足がある。きたる4月に実施される山登りだが、これは異性の距離を縮めるのに何とも有効活用できるイベントだ。リア充キングなら女の子に囲まれて近づくのが困難だが、相手は一匹狼という名の独りぼっちだ。むしろいくらでも近づける！東雲先生は生徒監視の仕事があるから最後尾！いくらでもアタックのチャンスがあるのだ！」

「おお！ようやくまとめた作戦が来たじゃねえか！これなら行けるな」

「遠足当日までに、お弁当作戦が決行できれば文句なし。さあ！忙しくなってくるぜ！」

オレと政宗が意気込んでいると、乃之亜ちゃんが申し訳なさそうに手を上げた。

「あ、あの」

「どうしたの？」

「き、聞いてませんか？……生徒会が潰れたから、その行事はもう出来ないんですよ？」

「「え？」」

オレと政宗が、共に時間静止の魔法をかけられた。ていうか、会長も副会長もいるじゃん？

「お二人は確かに臨時生徒会員としていますが、ほら、希先輩は知らないかもしれません、洋季さんがボコボコにされた会長さんに無理矢理生徒会の解散命令を出させて」

「よ～～～お～～～き～～～」

コードネームM、名称マサムネから只ならぬ闘気を感じ。危険。危険。

「待ってくれ！あれはアリスを助けるために必要な行為だったんだよ！あのままだとアリスが生徒会に入れられるところだったんだぞ！だから御慈悲を！」

「ぬ……………それもそうか」

政宗から闘気のオーラが出なくなったところで、この問題の解決法を考え始める。

「生徒会の解散がここで痛手となるとはな。まあ、建前でも生徒会主催なわけだし、生徒会に代わる組織が必要だな……………よし！」

オレは頭の上に電球を付けた。

「政宗！お前ならどんな事があるうと、絶対に協力してくれるよな」
オレがそう言うと、政宗は怪訝な顔をしながらも頷く。

「ああ、協力する」

「よし。じゃあ、とりあえず明日になったら乃之芽にも説得しといてくれ！」

「は？何を？」

「明日になれば分かる！」

オレは成さねばならない仕事をするため、職員室に寄った。

翌日。晴天なり。

そして、オレは放送室に朝早く居た。

ポスターの掲示も終了しているので、後はここで放送を入れるのみ。登校してくる学生も増えたところで、オレはスイッチを入れる。

「グッドモーニングエヴリワン！掲示されているポスターは見てくれたかな？本日は皆さんに重大発表がございます。先日、不慮な事故により解散された生徒会。これにより本校の行事のほとんどに何らかの影響が出る事になりました。これは非常に看過できない事で

あります。よって、新組織の発足に踏み切りました。会長職には、前生徒会会長の勝浦春氏が。副会長には同じく、皐月美恵氏が着任します。続きまして、新組織のリーダーに、総統として夜桜乃之亜氏。副総統には咲根アリス氏。経理長に伊達政宗、じゃない、希氏。行事進行責任者に夜桜乃之芽氏。以上の人達に、我が校の新生徒会の『バルドル生徒会』を運営していくことをここに明言します。バルドルって何か知ってる？北欧神話に出てくる光の神なのさ。彼の影響力は凄まじく、地獄に落ちたため、世界はラグナロクが起きたとされているんだ。なに？意味が分からない？じゃあ検索しろ。要するにこの生徒会は光だ！この学校を明るく照らす光なんだ！じゃあ、放送はここまでとします。以上」

オレはスイッチを切った。

完璧だ。この言葉意外、オレが言うべきことがあるか？

このバルドル生徒会を立ち上げた事により、生徒会以上の権限を持つことが出来た。

それに、今頃はあのポスターと名称した、メンバー達の隠し撮りプロマイド拡張版を貼ったんだ。乃之芽のお昼寝ポーズの写真や、アリスの体育の時間のテニス、しかもユニフォーム姿の写真や、乃之亜ちゃんの猫とじゃれあう写真、そして政宗の部活、剣道をした後のイケメン写真などなど。一種の布教活動に近い動きだが、他生徒の反応は上々、人気が出るのも時間の問題だ。それに、先生達の説得は既に終わっている。なにせ生徒会への誘いがあつた政宗や、成績優秀な夜桜姉妹。更に品性方正な優等生アリス。この四人をトツプに据えると言ったのだ。むしろ感謝された。顧問も碁五郎先生が生徒会に引き続き受け持ってくれたし。この布陣に隙などない！今までの雑記は会長副会長コンビに任せ！そして重要な行事の時は裏で偽装工作が出来る。

「ふふふふ、はっははははははは！……！」

オレは己の才能の高さに振るえ、武者震いをした。

「で、生徒会を作ったところまでは褒めてやるが……」

乃之芽が鬼武者オーラを出しながらオレを睨みます。

四人に生徒会室に呼び出されたオレ。何気にピンチ。皆さん怒ってます。

ど、どうして怒るんだ！

「「「あの写真だよ！」「」「」

オウ！ポスターね。はいはい。

オレは四人から集団リンチを受けた。ひどい。

P9「やったって後悔はするものだ」(前書き)

やらずして後悔する？ やって後悔する？

でもぶっちゃけどっちも後悔はするんだ。

だが、やらなけりゃ未来はない。やれば未来はある。

そゆこと

P9「やっ たつて後悔はするものだ」

太陽ががんばって陽を照らす中、体育館裏の日陰にわざわざ隠れているオレ。

体育館の中では新生徒会のバルドル生徒会のメンバー達の親任式が行われています。

やれやれ、世話の焼けるやつらだぜ。

「そこにいたかサボリ野郎」

おっと、こんな辛気臭い場所に見回りの先生が来てしまった様だ。口の悪さとハスキーボイスが目立つ東雲先生。本日は竹刀無しのようです。

まあなくても十分強いけど。

「相変わらず失礼なやつだ……ほら、早く中に来い。立ち上げた本人はお前だろうが」

「頼まれた仕事をやってただけですよ。オレに役職はないでしょ？」

オレは一人で手品道具をひろげながら練習をしていた。

トランプを混ぜて一枚だけ選ぶ。それを透視能力で当てる。これはスターの18だな。

「そんなマークはない。数字も13までだ」

ふむ。失敗か。ところで海外では13が不吉な数字なのに、なぜトランプはあえて13までしかないのかね？

「知るか……それよりも……戻る気がないなら……わ、私の相談を聞いてくれないか？」

頬を赤らめてオレの隣に腰を下ろす先生。うはっw可愛いなおいww正直ずっとそのままであればモテるのにな。もったいない。

「うるさいな……なあ、私は……どうすればいい？」

「何を？」

「……いい加減なやつだな。知っているだろう？……黒三沢が、

その……私を好きだと」

「告白したと……で？」

オレの飄々（ひょうひょう）とした態度が、どうも気に入らない東雲先生。

自然と言葉に強い調子が入ってくる。

「お前はどこまでも無神経な男なんだな！……教師と生徒の恋愛は、その、あまりよくないというか……その、色々とな」

「まあ問題はありますね。で？それはそれとして、どう答えます？」

「いやだから……あ、あいつの将来も考えてだな」

「将来を考えれば好きな女性と結ばれるようにしてあげたいですよ
ね？」

オレの答えがあまりにも意地悪すぎたためか、東雲先生は詰まる。

「……そんな事を言ったら……私の、理性が飛んでしまいそうだ」

「あなたが正常な理性を働かせているというのならオレへの暴行も
もうちよつと緩和されてもいいでしょう？」

「それはそれ」

これはこれですか。

「……私だって、女なんだから。あんな本気の告白をされて揺れないわけがないだろう」

「じゃあオチチャえばいいじゃないですか。真剣に愛してくれる相手に惹かれた。理由はそれで十分でしょうに？」

「そうはいかんだろう……」

体操座りで顔を膝にうずめた東雲先生。おやおや、相当悩んでいるようだ。

「そんなに怖いですか？」

「……相手は生徒だ。一時の感情に流されているだけかもしれん」
「佳孝が一時の感情に流されるような軽いやつに見えますか？色んな意味で自分を貫いている気がします」

「そ、それでも……自分より、若い子ってのは……な」

「男だったら10も20も若い女の子と結婚できたら誰もが喜ぶの

に。女性は大変ですね？」

「ふふ、何せ10も20も年上の男に女は惚れるんだ。だから、その逆だと、どうもな」

「やれやれ。どうも踏ん切りというか、思いっきりが足りませんなあ」

「じゃあ、眼中にないって言ってやればいいじゃないですか」

「それが出来なくて……困っているんだよ。本当はそうするのが一番だと分かっているんだが……未練がましいのは女の性だな」

「世間ではそう言った状態を『惚れてる』って言うんですよ」

「バツ！そ、そう言うわけじゃ」

あゝあゝ、顔を赤くさせて湯気まで出しちゃって。遅咲きの青春がここに戻ってきたってか？

「茶化すな……ああもう！お前と話すと纏まるものも纏まらん！いつもそうだ！お前は周りを振り回しておいて自分勝手に生きていて……全く……羨ましいとは、この事だよ……」

うゝん。今までにないほどの乙女オーラ全快の東雲先生。

その上なにか感情に押されたためか目が潤み始めている。このままではいかな。

オレはランプをきつて、一番上のカードをめくった。

「……ハートのエース。いわゆる『たった一つの愛』ってやつですな」

「なんだそれは？」

「家族や友人などにむける愛は無数にあっても、この世で決めたたった一人にはまた違う愛をむけるって意味ですよ。そう、一つしかない愛をね」

「……言ってて恥ずかしくならんか？」

聞いてて恥ずかしくなってる東雲先生と違って、私のハートは鋼鉄なんです。

「で？どうです？結婚しちゃう覚悟は出来ました？」

「けっ！結婚て！おま！そりゃ早計というか、そんなに話が跳躍す

るのか？え？え？」

なるほど。慌てふためく様子が面白いと言った桜田先生の言葉が今理解できた。

「からかったのか！」

東雲先生が怒りのあまりオレをタコ殴りにする。やばい、この人力を制御できてねえ。

「まって！違う！ただ佳孝のことだからそこまで覚悟してるだろうと！」

オレのその台詞に、ようやく東雲先生のラッシュが止まる。

オレは他界寸前で一命を取り留めた。

「い、いい加減……ウジウジするのは止めてくださいよ。授業もほっぽいて、最近では生徒指導も満足に出来ていないって……それじゃあ他に迷惑掛けまくりでしょう？」

オレが説教じみたことを言うつと、意外にも東雲先生は小さくコクンと頷いた。

「佳孝は信用できる男なのは先生も知っているでしょう？大丈夫だって、一度付き合ってみてから、また将来のことはお二人で考えてくださいよ」

「……………うん」

おいおい。あの猛獣がまるでチワワの如く大人しいぞ？恋のパワー恐るべし。

「じゃあ。返事はオッケーで返すんですね？何なら今から集会をジヤックして東雲先生と佳孝のカップル成立宣言をしてあげましょうか？」

「殺すぞ」

わーお。その獅子も逃げ出すドぎつい両眼の黒い光はなんですかあ？やっぱり東雲先生は最強でした。

集会も無事終わったらしく。生徒達が解散してます。

「じゃあ先生。ガンバッ」

「うるさい」

いつものクールな返事が返ってきました。ほほう、頼もしい。

「あ、そうだ。佳孝が言っていたんですけど……… か弱い部分を見せたんですって？」

「……………！！！！！！」

東雲先生が何かを思い出したらしく。今までにない声にならない叫び声をあげる。

「えー？ なになに？ 甘えたんですか？ それとも泣いた？ 意外にも強い先生の弱さを見て佳孝もオチたつて言うし。実は計算ですガブファ！」

「死ね！ 忘れろ！ 消えろ！ 去れ！ 悪魔！ 殺す！ ぶっ潰す！ 擦り切れろ！」

怒涛の先生必殺コンボ炸裂。オレの人生ここでデットエンド。

時刻は午後になり、部活動時間です。

そして何もなければずのオレは職員室で暮五郎先生の前にいます。

「はてさて、一体なんのようですか暮五郎先生」

「いやなに。顧問代理を君に頼もうと思ってね」

このおっさんは目を閉じながら何を言っているんだ？ 寝ぼけているのか？

「失礼なやつだな。寝てはいないさ。それよりも、君の組織進行能力は中々のものだと思う。会長の春君と仲がいい理由も分かった気がするよ」

よもや初めての出会いが道行くお姉さんにアドレスを聞いて回り、多くゲットできた方が勝ちという勝負をした仲だとは、とても言えないな。

「…………… まあ、私もそんな経験はある。心にしまっておこう」
話の分かる先生だ。今度はぜひとも先生と勝負をしてみたい。

「そんなことよりも、代理のことだが……受けてくれるかな？」
「ことわゝる」

「出来ない相談だな。私は今年、念願の探偵クラブの顧問になれたのだ。ぶっちゃけるとそっちに力を入れたい」

あんたどこまでソノ設定を引きずるつもりなんだ？

「ともかく、頼んだよ。むむ？ホームズから連絡か」

「は？携帯も何も鳴ってませんよ？」

「電波だ」

どうしよう。基本教師陣はオレより強者のようだ。

仕方ないのでオレは渋々代理を受けることとなった。

生徒会室に到着。

正直新組織には成ったが、活動場所も内容も、さして変わらない。
なのでとりあえず今日もソファアでゴロゴロしますか。

オレがドアを開けて中へ入ると、行き成り書類の束を持った誰かとぶつかった。

「きゃっ！」

「ん？」

派手に散らばる紙と、倒れる女子生徒を反射で抱きとめるオレ。しまったいつもの癖が。

「ごめん。大丈夫かい？」

「え？……あ、はい。大丈夫です」

え？これはもしかや恋の予感か！？

「ありがとうございます。では」

目の前の女子生徒は素早く地面に散らばった紙を集めると、爽やかな笑顔でドアから出て行った。うむ、実にあっさりと。

「……あれ？ここはそこはかたなくいい雰囲気になるはずでは？」

オレが目を点にしていると、今度は会長が慌しくドアを開けて部屋に入ってきた。

「ん？洋季か？悪いが邪魔だ。遊ぶなら余所へ行ってくれ」

「……………ああ、ごめん」

遊ぶ気も何もないのだが、正直ここにいると嫌な予感しかしないので早々と退場しよう。

「あああああ！……洋季さん！丁度いいところに！」

わお、総統の乃之亜ちゃんが珍しく声を上げちゃってるよ。どうしたのかな？

「どうしたもこうしたも！もうすぐ始まる登山遠足の企画と要項まとめに日時と場所の確保などの準備がまだなのでこっちは大忙しなんですよ！それに希先輩は春の各部活大会に向けての話し合いと新部活費用の取り決めで忙しくて！お姉ちゃんは夏に来る体育祭の事前取り決めの準備中だし、アリスちゃんは他校への新生徒会発足によるあいさつ回りをしているんですよ！会長さんと副会長さんは風紀の取締りのため、風紀委員と今校則の改正を話し合っているんですよ！」

すごい！あの寡黙な乃之亜ちゃんがツツコミ並によく喋ってるぞ！
「ふざけないでください！それよりも、顧問の碁五郎先生の代理を任されましたよね！」

「あ、うん、えつと、まあ、そうだと言えばそうかなというか」

「はい、じゃあまずは春の登山遠足の開催場所は例年通りの『楠高山』^{なんこうざん}でいいですね？まずはその管理者さんに電話を入れて了解を取ってください。一応役所でよかったと思います。続いて日時と参加生徒数ももうこの紙にまとめられていますからね。後は最悪の事態を考えて山岳救助隊への事前連絡もしてくださいね。当日何かがあれば動けるようにお願いしてください。それが終わったら企画書に目を通して校長先生に伝達をお願いします」

乃之亜ちゃんの素晴らしい滑舌^{かつぜつ}の良さを堪能したところで、さあ、めんどくさい事になってまいりました。

「ああ、あと洋季、こっちの校則改正の資料も読んでくれ。こっちで結論が出たら同じく校長先生、並びに教務主任に話をしておいてくれよ。なにせお前の仕事は顧問代理、要するに先生の代理だ

から、俺たちと教師の橋渡しをしっかりしてくれよ」

春が悪い笑顔をこちらに向けながら言います。ぜってーシメる。

「さあ！洋季さん！忙しくなりますよ！」

「自分でしておいてなんだけど、後悔でいっぱいです」

それでも強く生きていくって、大切だよね！

P9「やっだって後悔はするものだ」(後書き)

P10「玉子焼きは焼き過ぎないように」(前書き)

手料理できる女の子は最高です。

P10「玉子焼きは焼き過ぎないように」

家庭科調理室。幾台か置かれたガスコンロと流し台。

家庭科の授業で時たま使われるこの実習室も、大抵は家政部が部室として使っている場所だ。

本日はここを貸切、政宗指導の下、乃之亜ちゃんのお料理教室を開く。

お題は『お弁当』。試食はオレとリア充キングだ。

「ああゝあゝ、夜桜さんの手料理が食べられるんだと期待したのに……夜桜さんは夜桜さんでも妹さんじゃなかゝ！乃之芽先輩のを食べたい！つーか乃之芽先輩を食べたい！」

なにやら爆弾発言どころか核弾頭発言をしている龍介だが、ここは無視に限る。

「コイツは頭も人格も破壊的に最低だが、見た目のお陰でリア充キングの名をほしいままにしている。それ故に、今まで食べてきた女子の手料理弁当は親の手料理よりも多いらしい。評価はしっかり出来るから安心してくれ」

「のゝめえゝせゝゝんぱゝゝゝい」

どうしよう。コイツこんなキャラだったかな？

「手始めに玉子焼きだな。初心者には意外と難易度の高い料理だが、お弁当にははずせないおかずだ。味付けも大切だが、やはり見栄えがモノを言うな」

バンダナと白いコックの服装をする政宗。うん。お世辞抜きに似合う。

「た、玉子焼きぐらい作れますよ」

乃之亜ちゃんは淡いピンクのエプロンだ。うむ。感無量。

「じゃあ、とりあえず作ってみてくれ」

乃之亜ちゃんが元氣よく返事をして、フライパンを手に持った。まずは卵を手取る。そして適当な容器に卵を割る。

わっお。流し台の角で叩くが、力を入れ過ぎたために殻と中身がブレンドされてしまった。

「……えっと、これを容器に」

「まあ待て洋季。卵の殻にはカルシウムが豊富に含まれているんだ。アメリカのボクサーには卵の殻だけをあえて食べる選手もいたらしいぞ」

オレのツツコミも流されるまま、次の工程へ。

ここまで順調だな。そして、ここで味付けをする。

「えっ」と

「……まあ、パラパラッと」

「ズサー」

116

「あわわわわ……み、水」

「ダメだ！水を入れたら玉子焼きでなくなるぞ！」

「政宗！お前の目にはまだこれが玉子焼きに成れると思っているのかああああ！！！」

オレがそう叫ぶと、政宗は冷静に言葉を返した。

「安心しろ。多分どうにかなる」

「違うだろ政宗？お前そんなキャラじゃないだろ？そんな可愛いボケをかますやつだったか？クールに台詞を言おうとして囁んじやう可愛い子ってキャラだろ？路線は変えちゃいかんぞ？」

オレが言い終わると久しぶりの鉄拳がオレの頬に入った。

ようやく焼く作業に入ります。

「フライパンは十分に熱して……よしっ」

乃之亜ちゃんはマイペースに料理を進めていますが、食べる側のこちらにとっては気が気ではありません。

そんな我々の気など微塵も感じず、乃之亜ちゃんは溶き卵をフライパンの上に流しました。

「……あれ？油は？」

「……え？いるんですか？」

はいアウトオオオオオオ！！！今度こそダメだよ！だって油ひいてないじゃん！それってこげるって意味だろ！？はい失敗！作り直しましょうね！

「……いや！まだいける！」

「いけねえよ政宗！いけるわけがねえ！行くとしても地獄への片道通行だ！」

オレと政宗が言い争っていると、フライパンから黒煙が上がる。

「きゃあ！なんですかこれ！？」

「こっちこそなんですかってやつだよ！！乃之亜ちゃん！これはヘタとかそんなレベルじゃない！君は出来ない部類の子なんだ！まずは政宗の手本を見よう！ね！」

オレの説得が通じたためか、乃之亜ちゃんは大人しく言うことを聞いた。

「さて、こんなものだな」

ほう。早速政宗の作った玉子焼きが皿の上に盛り付けられる。

「味は濃い目だ。ちょっと塩辛く感じたらご飯でごまかせ」

「意外とアバウトだな。どれ」

オレは一口玉子焼きを口に放り込む。おお！ふんわりとした食感！しつかりきいている味！確かに濃い目だがオレは好きだ。そしてなんと言ってもこの生地の滑らかさ！舌の上を転がるとはこのことか！

「うまい！いや、本当においしいな！」

「うまうま」

リア充キングが適当な回答をしているが、これは確かにおいしい。

「乃之亜ちゃんも政宗の料理スキルを習得すれば絶対うまいくつて！」

オレが玉子焼きにがつつきながらそう言うと、乃之亜ちゃんも政宗の玉子焼きを食べてみた。

「ほ、本当です………すごくおいしい！」

「あ、ありがとうな。まあ、実は人に作るのは初めてなんだが」

照れ隠しに笑う政宗。そしてあつという間に食べきるオレ。

「さて、こうなると他の女性陣はどんな玉子焼きを作るのか気になるな」

「な、なんだ唐突に？」

政宗がオレの方を向いて怪訝な表情を浮かべる。

「そのままだ。他の女性陣は作った玉子焼きを食べ比べしようと思っただけだ！」

「ええ！それは乃之芽先輩の玉子焼きが食べれるという事か！」

リア充キングが早速元気になる。だが残念。乃之亜ちゃんの力量から見ても、姉御の料理の腕は信用ならないものだと思われる。

だがまあ、呼ぶだけ呼ぼう。

さて、数分後にはそれなりな知り合いが揃った。

まずはアリスと乃之芽。そして副会長と東雲先生が来た。

試食には会長と佳孝が追加。さあ！レッツクッキング！

「でえええええ！！洋季さん！なぜ黒三沢先輩がここに！？」

「ああ、なんか来ちゃった」

乃之亜ちゃんがフライパンをもってオレを追いかける。やべえ、超怖い。

何はともあれ、四人の料理人たちがこぞってクッキングスタート！

「……ドーン……」

なんとおおおおお！！四人全員から黒煙があああああ！！

うつそだろ？こいつらみんなド下手？え？マジすか？

オレがうるたえていると、政宗がなにやらアドバイスをしている。

さあ！これでまともな料理が作れるようになるか？

「続行する！」

政宗から超大胆発言！やべえ！これ誰が食べるんだよ！

さあ、悪魔の時間となりました。

こちらには四つの玉子焼きがございます。不思議な事に黒い奴や、見た目は出来ていそうなものまで全部出来栄えが違います。これは本当に玉子焼きでしょうか？

「一番。副会長こと皐月美恵。試食相手は指名で会長！お願いします！」

いつの間にか出来ている悪魔のシステム『指名制度』。だが、これなら一人が犠牲だから大丈夫だな。

「ぼ、僕か……いいだろう。いただきっ」

さすが会長。男らしいぜ。さあ、問題の玉子焼きは？

会長の目の前に出されたそれは、炭の物体のようであった。ていうか炭だ。

「……………しゃり」

おお！一口食べるとこの音！もう食べ物じゃないよこれ！

「お、美味しゅうございますか？」

「……………ああ、実に個性的だ」

う、うまい返した。そして律儀に全部食べる。すげえ、マネはしたくないけど。

「二番。夜桜乃之芽。指名はそうだな……………」

「はいオレ！オレ！夜桜さん！食べさせてください！」

「え？ああ……………じゃあ、設楽」

リア充キング……………お前の事は忘れないぜ。多分。

さあ、それで龍介の目の前に出された玉子焼きは？

なに！？黄色の黄金色に輝くこれは本物の玉子焼き！？い、いや、だが味の保障は？

「うんま……………い！美味しいです先輩！」

「あ、ありがとな……………へへっ」

なんということだ。一見失敗したかに見せての成功？こいつは驚きだ。だが、二人の仲も悪くはなさそうだな？いいんじゃない？いいんじゃないね！！

「三番。しのめはすみ東雲蓮実。指名は……………よ、佳孝、頼む」

「はい！もちろん！」

えええ！？先生の名前つて蓮実なんだあああ！！！

「どこに驚いてんだよ！それより！」

政宗がオレのツツコミにつっこむ。そして、こそこそと話し始めた。「いいのか？先生と黒三沢を更に接近させるだけなんじゃ？」

「ふふふ、甘いですね政宗。いいかい？意外にも乃之芽の姉御は美味しいものを作ったようだが、基本、料理で爆発させた先生の玉子焼きがうまいわけがない！ここは好感度アップに見せかけて、まずい料理を食べさせてむしろ好感度を下げるってのが目的なんです

よ！」

オレが黒い顔でそう言うと、政宗はまたもや納得の行かない顔をする。

「そ、それは卑怯だろ！せめて、乃之亜の料理も食べてもらってだな！」

「なに自滅行為をしようとしているんだ！切腹はいかんぞ切腹は！オレに手刀を振り下ろす政宗。むしろオレが首切られた状態だ。

さあ！首に違和感がありますが、佳孝の目の前にはやはり黒焦げの玉子焼きが！副会長よりはマシっぽいがそれでも十分不味そうに見える！いけるぜ！

「いったただつきまゝす」

ふむふむ。まずは一口。さて？どんなお味だ？

「やっぱり不味いね。もつとお料理がんばらなきゃ」

「う、うん。桜田先生に教えてもらっているからもうちょっと待っててね！」

「うん。がんばってね！」

……………え”？

しまったああああ！！これは予想外！二人の仲は更に進んでいただとおおお！？！？

やばい！これはむしろこちらに多大な損害が！

「おい洋季！乃之亜が倒れたぞ！！」

はんぎゃあああ！！総統！しっかりしてください！！

残念な事に、こちらが有利になると思われた料理対決は、我々の惨敗だ。乃之亜ちゃんはあるのショックに現実逃避に入ってる。今は壁に向かってお話中だ。

「四番。咲根アリス。洋季！せつかくだから食べてよ！」

オウ、ここにきてオレにご指名が来ました。

だがまあ、副会長がめっちゃ下手だったけど、あとはみんな食べれ

るみたいだし。アリスはごく普通の女の子だ。大丈夫大丈夫。

オレは目の前に出された玉子焼きを見た。

なにやら玉子に混じって動いている生命物体がいる。やだ、ここにきてハズレ引いちゃった!?

「えへへ、いろいろ混ぜてみたんだ」

このやるー。可愛く言ったって意味ねーぞコンチクショウが。

ま、まあ、不味いとは限らないさ、どれ一口。

オレは意を決してその物体を口に運ぶ。そして飲み込む。

「……………!!!!!!」

全身に走る電撃!そして灼熱の痛み!背筋はなぜか凍りつき寒気まで!?!により声が出せない!?!なんだこの衝撃は!?!

「……………!!!!!!」

オレは昇天した。お花畑で小一時間遊んじまったぜ。

P10「玉子焼きは焼き過ぎないように」(後書き)

手料理できなくても一途な子は最高です。多分……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7495j/>

非常識な恋模様

2010年10月11日15時48分発行